

二本松市文化財調査報告書第15集

二本松城址Ⅲ

—平成10・11年度発掘調査報告書—

平成12年3月

二本松市教育委員会

二本松市文化財調査報告書第15集

二本松城址Ⅲ

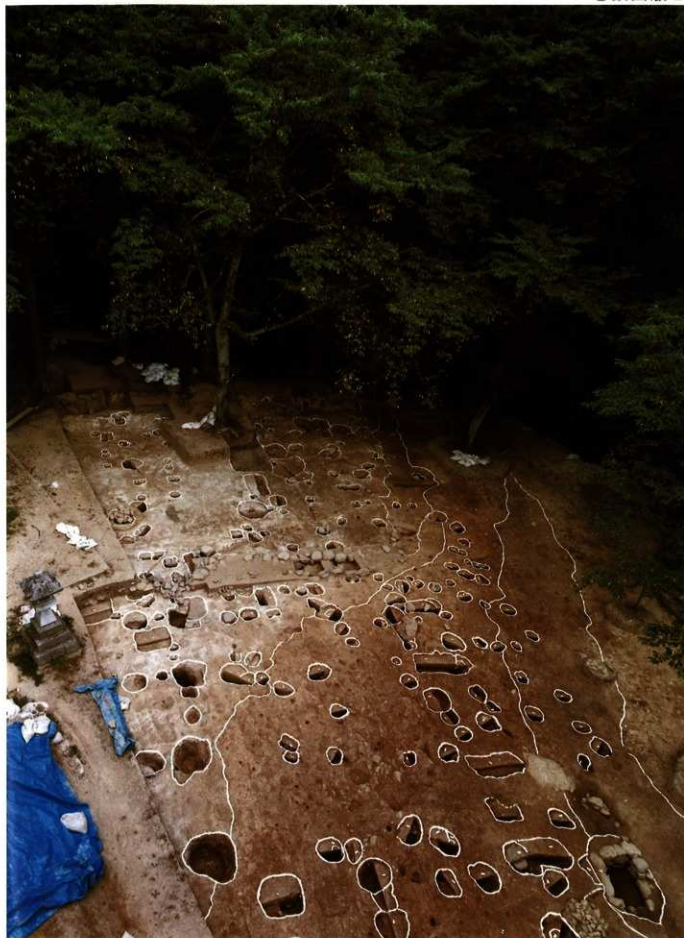
—平成10・11年度発掘調査報告書—

平成12年3月

二本松市教育委員会



二本松城址（少年隊の丘）第3・4次調査状況



第4次調査 北部精査状況 (SB01、4-SD01、SA03、SA04、SA05)



1 皿：志野織部（3-7区 3層出土 SA01）

3 焼土6出土遺物（陶磁器、壁材、炭化材、竹、カヤ）



2 漆塗木製品（焼土6、最下層出土）





1 碗：相馬 (4-P69)



2 碗：相馬 (4-SD01)



3 碗：肥前 (4-A4区2層)



5 小碗：相馬 (4-SD01)



4 髪水入：瀬戸 (3-P45)



6 皿：青磁 (4-B区入口部)



7 香合 (3-SK02内P1)

序 言

二本松市の歴史的シンボル“二本松城址”は県立霞ヶ城公園として市民の憩いの場であり、遠来の観光客が訪れる史跡名勝地としても知られています。その基盤となっているのは、室町時代中期から江戸時代が終わりを告げるまで四百有余年の間、数多くの城主変遷にもかかわらず同一区域で城が営まれていたという、類例を見ない城歴の積み重ねであろうと思われます。

その城歴を解き明かすためには、古文書等の史料や古記録に頼ることは勿論ですが、その裏付けとなる事実関係は発掘調査によって検証・確認することが重要な作業といえます。しかし、先人の貴重な文化遺産である二本松城址を後世に残していくためには、その保存方法や活用手段など慎重な検討を要する大きな課題が付きまとっていました。

そのため平成6年度に斬界の専門家の先生方をご委嘱申し上げ、二本松城学術検討委員会を設置し、以来9年度まで城址に関する遺構の現況把握や現存する史料に基づいて、学術的見地に立った総合的な調査・検討をいただきました。その結果、二本松城址全体に係る保存管理計画策定のための提言書として、現況の諸問題に係る指摘や今後の保存管理と活用を進める上での指針などの報告がなされています。

その中で、遺構の確認すべき重要調査区域が示されたことから、平成10年度を初年度として長期年次計画による発掘調査に着手いたしました。本書は、平成11年度の2ヵ年にわたる新城館跡の調査結果を纏めたものですが、所期目的以上の成果があり、今後の調査にも大いに期待ができるものと確信しております。

最後ではありますが、本調査にあたり指導・助言をいただきました田中正能先生及び鈴木啓先生、並びに県教育庁文化課、さらに作業に従事いただいた皆さまに対しまして衷心より感謝申し上げます。

平成12年3月

二本松市教育委員会教育長 市川 義

例 言

1. 本書は、平成10年度および平成11年度同庫補助事業として二本松市教育委員会が実施した二本松城址総合調査事業における発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 出土遺物の整理は洗淨・注記を菅野幸子、門馬久子が実施し、分類・復元については遠藤千映美、櫻井竜司、国分健太郎の協力を得た。
3. 遺物の実測・トレースは遠藤が、古銭の拓本は根本が担当した。また遺構遺物の挿図・版組は中村が担当し、その修正は国分健太郎、門馬久子、橋本陽子(二本松市教育委員会文化課臨時職員)の協力を得た。
4. 遺構および遺物の写真は中村が担当し、航空写真は㈱シン技術コンサルによるものである。
5. 本報告書の執筆は中村が担当した。
6. 本調査における遺構の平面写真測量は㈱シン技術コンサルに、出土炭化材の年代測定および樹種同定は盛古環境研究所に委託し、自然科学分析の成果は付章として掲載した。
7. 本調査で出土した遺物および写真・図面等資料は二本松市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 測量における基準設定は㈱シン技術コンサルに依頼し、遺構実測図中の方位は座標軸を示す。
2. 遺構実測図のうち断面図に示した数字は海拔高度を示し、平面図のアルファベットは対応する断面図の位置を表している。
3. 遺構番号等は平成10年度(第3次調査)検出のものは3-〇〇、平成11年度(第4次調査)のものを4-〇〇と表記して区別し、特徴的な遺構および特徴的な遺物を出土した遺構に限って記述した。
4. 遺構断面図の色調は農林水産農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖(1990年版)」によった。
5. 遺物は古銭拓本のみ原寸、その他は1/2で収録した。遺構については図ごとに縮尺を示した。
6. 陶器類において釉の範囲を一点鎖線で示した。
7. 本文中で使用した略号は次のとおりである。

SB…掘立柱建物跡 SA…柵列 SK…土墳 SD…溝跡 P…柱穴
焼土…焼土遺構

目 次

巻頭図版

序言

例言・凡例

第1章 遺跡の環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 過去の調査	3
第3章 調査経過	5
第1節 調査要項	5
第2節 調査に至る経過	5
第3節 調査日誌	6
第4節 調査方法と概要	9

第4章 調査結果	10
第1節 遺構と遺物	10
(1) 掘立柱建物跡	10
(2) 櫛列跡	14
(3) 溝跡	18
(4) 土坑	23
(5) 焼土遺構	24
(6) 特殊遺構	29
(7) 平場入口付近	32
第2節 まとめ	40

挿図目次

第1図 遺跡位置図		第13図 焼土6実測図	28
第2図 二本松城址と周辺の遺跡	2	第14図 石敷遺構・4P242実測図	30
第3図 過去の調査区域および第3・4次調査範囲	4	第15図 石組遺構1・石組遺構2実測図	31
第4図 二本松城址第3・4次調査遺構配置図	7	第16図 B区[平場入口部]実測図	33
第5図 SB01実測図	11	第17図 出土遺物(1)陶磁器類	34
第6図 SB01断面図	13	第18図 出土遺物(2)陶磁器類	35
第7図 SB02実測図、焼土6上層注記	15	第19図 出土遺物(3)古銭	35
第8図 SB03・SA02実測図	16	第20図 出土遺物(4)鉄製品：遺構内	36
第9図 SA01・SA03・SA04・SA05・SA06実測図	19	第21図 出土遺物(5)鉄製品：遺構外①	37
第10図 4-SK03・4-SD02・4-SD01実測図	22	第22図 出土遺物(6)鉄製品：遺構外②	39
第11図 3-SK01・3-SK02・4-SK05・3-P143実測図	25	第23図 出土遺物(7)銅製品	39
第12図 焼土3・焼土4・焼土5実測図	27		

表 目 次

第1表 二本松城址と周辺の遺跡	2	第4表 出土遺物観察表[古銭]	39
第2表 出土遺物観察表[鉄製品]	38	第5表 出土遺物観察表[珪石]	40
第3表 出土遺物観察表[銅製品]	39		

図版目次

巻頭図版1 二本松城址(少年隊の丘)第3・4次調査状況	巻頭図版3 出土遺物(1)
巻頭図版2 第4次調査北部精査状況	巻頭図版4 出土遺物(2)
図版1 櫛列跡・溝跡検出状況	図版7 平場入口部調査状況
図版2 出土遺構半裁状況	図版8 遺構内出土遺物(1)
図版3 出土遺構半裁状況	図版9 遺構内出土遺物(2)
図版4 焼土遺構半裁状況	図版10 出土遺物：4-SK03・遺構外・基石
図版5 石組遺構精査状況	図版11 出土遺物：鉄製品・銅製品・古銭
図版6 石敷遺構精査状況	図版12 自然科学分析：顕微鏡写真



第1図 遺跡位置図

第1章 遺跡の環境

第1節 地理的環境（第1図）

二本松城址における現状および周辺の地形については、『二本松城址Ⅰ』（1992年二本松市教育委員会）の第2章で詳述しているため、今回の調査地域に限って記述する。

平成10・11年度に調査を実施した平場は、通称“少年隊の丘”と呼ばれ、標高約315.5mに位置する。二本松城址の中では頂上の本丸の南西側にあたり、大きな平場としては本丸に次ぐ標高にある。調査地は約40×30mの南北に長い舌状を呈しており、なだらかに南へ傾斜し、南北の比高差は約2mを測る。芝生で覆われ、現在“二本松少年隊”を顕彰する記念碑が平場の北西隅と、南側中央に立てられている。中央部の南北に走る通路に伴い、南辺中央部は階段が設置され削平を受けたようにみうけられる。また北辺には高さ約1.4mの土塁が位置し、やはり通路の部分で土塁が途切れた形となっている。さらに、この平場の南側には約5m低い平場が位置しており、“智恵子抄詩碑”が立てられていることから通称「智恵子台」と呼ばれている。東西30m、南北25mを測り、この両平場をあわせて絵図面に記される「新城館」と認識されている。

これらの平場の東・南・西は急峻な崖地となっており、北側にはのみ通路が接続する形となり、さらに急峻な崖を経て本丸に達する。したがって、城郭として機能していた時代には当平場に入出入りするにはこの北側の通路を利用したものと想像でき、この通路が城内との連絡路であったものと考えられる。

第2節 歴史的環境

二本松城址全体の城歴及び築城・城下町整備等に関する史料・記録類は『二本松城址Ⅰ』（1992年二本松市教育委員会）の第3章に詳述しているためここでは省略し、周辺の遺跡について記述する。

【周辺の遺跡】（第2図、第1表）

本遺跡(1)は市内西側に所在する標高340～350mの丘陵部の中で最も東に位置し、わずかに開けた南東及び南側には市街地が接しているため、周辺は遺跡の密度が薄い。西側は約2.5km、南側及び東側はそれぞれ約2kmほどで羽石川、及び阿武隈川に接していて、この範囲には遺跡がほとんど所在していない。このため北側に分布する遺跡を中心に概観する。

まず縄文時代の遺跡であるが、本遺跡の北北西約1.7kmに田地ヶ岡遺跡(2)が所在している。油井川南岸の比高約15mの台地上に位置し、東西約600m×南北約200mの範囲で土器片、石器の散布が見られる。東部は小学校敷地、中央部は畑、西部は墓地及び山林として利用され、遺跡の中心は中央部より西側に集中すると見られる。なお、西端は昭和46年東北自動車道建設の

第1表 二本松城址と周辺の遺跡

No.	遺跡名	所在地	立地	現状	種別	時期
1	二本松城址	郭内3丁目他	丘陵尾板上	公園等	城館	中世～近世
2	田地ヶ岡遺跡	塩沢1丁目	台地上	畑、学校敷地、墓地	集落跡	縄文
3	塩沢上原A遺跡	上原	台地上	畑	集落跡	縄文
4	竹ノ花遺跡	上原	舌状台地上	畑、山林	集落跡	縄文
5	上原B遺跡	上原	独立丘陵	道路	集落跡	縄文
6	上原C遺跡	上原	丘陵南斜面	道路、畑	散布地	縄文
7	心安館跡	細野	台地上	畑、山林	城館	中世
8	田地ヶ岡館跡	上原	台地上	畑、学校敷地、墓地	城館	中世
9	上原館跡	塩沢1丁目	舌状台地上	畑、墓地、山林	城館	中世



第2図 二本松城址と周辺の遺跡

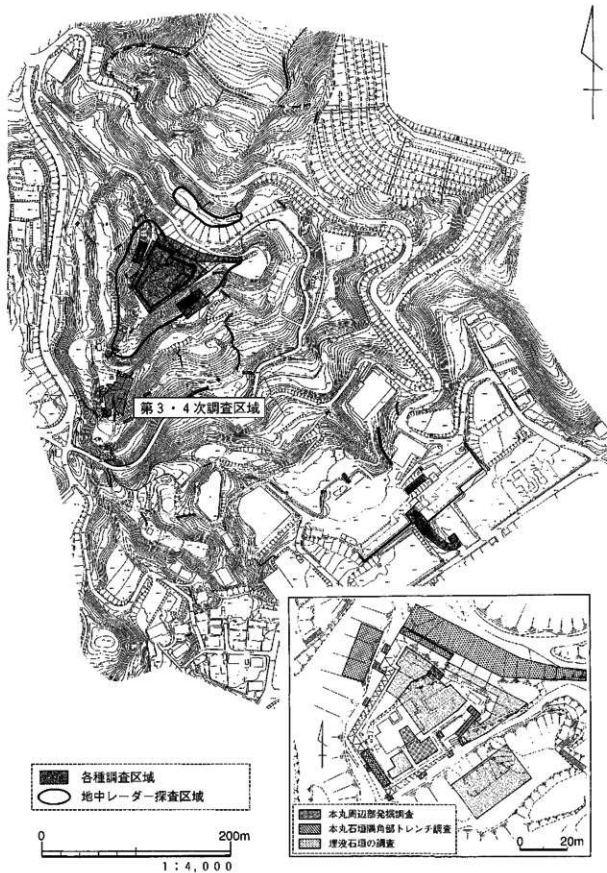
際に調査され、複式炉をもつ竪穴住居跡23軒、土器埋納遺構7基等が検出され、縄文時代中期の集落跡であることが明らかとなった。ここから北方約0.5kmの地点にはやはり縄文時代中期に属する塩沢上原A遺跡(3)が東西200m×南北200mの台地上に立地している。昭和46年には東北自動車道関連、昭和59年は福島県立博物館の学術調査、平成7年には道路拡幅工事関連として過去3回の発掘調査が実施されている。いずれにおいても竪穴住居跡、袋状土城が多数検出され大規模な集落の存在が明らかとなった。ここより東方約200mの舌状台地上には竹ノ花遺跡(4)が所在する。詳細は不明であるが塩沢上原A遺跡と同時期の遺跡である可能性が高い。さらに塩沢上原A遺跡の北東約200mには上原B遺跡(5)、さらに東北自動車道沿いの北東約200mに上原C遺跡(6)が所在している。いずれも昭和46年に東北自動車道関連で調査がなされ、前者は消滅している。これらの遺跡は塩沢上原A遺跡と同時期の遺跡であり、竹ノ花遺跡とあわせ縄文時代中期にこの地域で大規模な集落が営まれていたことが伺える。

次に中世城館をみると北方約0.5kmに心安館跡(7)がある。比高約30mの西から東へ張り出した丘陵尾根上にあり、主郭、空堀、土塁、腰郭などが確認され、新城心安館の居館に比定されている。二本松城の北側を防衛する重要拠点であり、二本松城の一部とみることできる。また、北北西約1.7kmに田地ヶ岡遺跡(2)と重複して田地ヶ岡館跡(8)が所在する。東西700m×南北400mの範囲を有し、比高約20mの南東広がり台地上にある。郭、腰郭、土塁、空堀等が残され、主郭の大部分は小学校敷地とみられる。奥州管領畠山高国・国氏父子が14世紀中頃に居城したといわれ、嘉吉年間(1441～1443年)に二本松城を築城するまでの約90年間機能していたものと見られる。ここから北西約800mには竹ノ花遺跡と重複して上原館跡(9)が立地している。比高25mの台地上にあり東西約200m×南北約150mの範囲で郭、腰郭、土塁、空堀が確認されている。城主等は不明である。

以上のように二本松城址周辺の遺跡の種類・分布には偏りが見られ、占墳及び奈良・平安時代の遺跡が見られないことが一つの特徴である。これは南側の平地が丹羽氏入部以降、現在に至るまで市街地化していることと大きく関係するものと考えられる。

第2章 過去の調査

当遺跡における過去の調査は、主に7回の調査が実施されているが、平面調査は本丸及びその周辺部と、箕輪門前の狭小な範囲のみである。したがって、城址の具体的な姿についてはほとんど解明されていないといってよい。これらの調査概要および結果については『二本松城址保存管理計画報告書』第3章第2節および『二本松城址Ⅰ』『二本松城址Ⅱ』に詳述しているため、そちらを参照いただきたい。(第3図)



第3図 過去の調査区域および第3・4次調査範囲

第3章 調査経過

第1節 調査要項

遺跡名称	二本松城址(遺跡地名表登録番号 2100019)
所在地	福島県二本松市郭内四丁目228-1
遺跡現況	公園
調査面積	約1,100㎡(遺跡全体面積72,000㎡)
遺跡性格	城館
遺跡時期	中世～近世
調査目的	保存管理計画に基づく資料収集のための発掘調査
調査期間	第3次：平成10年(1998年)6月8日～同年7月24日(延べ32日間) 第4次：平成11年(1999年)6月7日～同年8月21日(延べ46日間)
土地所有者	二本松市(市長 根本尚美)
調査主体	福島県二本松市教育委員会 教育長 市川 義
調査担当	中村真由美(二本松市教育委員会文化課主任主事・日本考古学协会会员)
調査員	遠藤千映美(平成11年度)
調査補助員	櫻井竜司(平成10・11年度) 国分健太郎(平成11年度) 新海和広 陣野律子 小針大志(以上、福島大学)
調査指導	田中正能(二本松市文化財保護審議会委員) 鈴木 啓(二本松市文化財保護審議会委員) 北垣聡一郎(石垣研究者) 木本元治(福島県教育庁文化課) 飯村 均(福島県教育庁文化課)
作業員	岩本 正 岡部良子 菅家勝豊 上屋 博 斎藤隆生 菅野勝与 早坂昌木 松本良吉(以上、地元有志) 勝本リン 菅野トキ子 菅野光男 大内正秀 菊地留一 斎藤重次 菅野藤次 鈴木良一 橋本忠夫 橋本時子 長谷川文三 三浦邦雄 三浦富雄 三村基吉 三村キクノ 宮島二郎 武藤清喜 古田清治 渡辺正治 渡辺金一 渡辺金造 渡辺忠一 渡辺マキ 渡辺松夫 渡辺三男 遊佐善七(以上(社)シルバー人材センター)

第2節 調査に至る経過

当城址は都市公園として利用されていることから、“遺跡の保存”と、“公園としての活用”という2つの面を推進していく必要がある。したがって、市教育委員会では平成7年から2ヵ年にわたって「二本松城学術検討委員会」を組織し、主に遺跡としての側面から城址の保存管理について調査・検討をおこなった。その結果は平成9年に「二本松城址保存管理計画報告書」

としてまとめられ、この中で保存管理、そして活用していくためには城址の現状把握、すなわち遺構の残存する場所と規模、性格等を把握することが最優先と指摘された。

この提言をうけ、まず平成9年度には城址の平面測量が実施され、正確な地形の把握がなされた。平成10年からは「二本松城址総合調査事業」と称し、長期計画により資料収集を目的とした発掘調査を実施することとなった。10年度は二城代時代に西城が置かれていた「新城館」と比定される平場である少年隊の丘を調査対象とした。土捨て場、面積等の事情から2ヵ年にわたって調査することとし、平成10年度は西半分の500㎡を、11年度は東半分の600㎡、あわせて約1100㎡の調査を実施した。

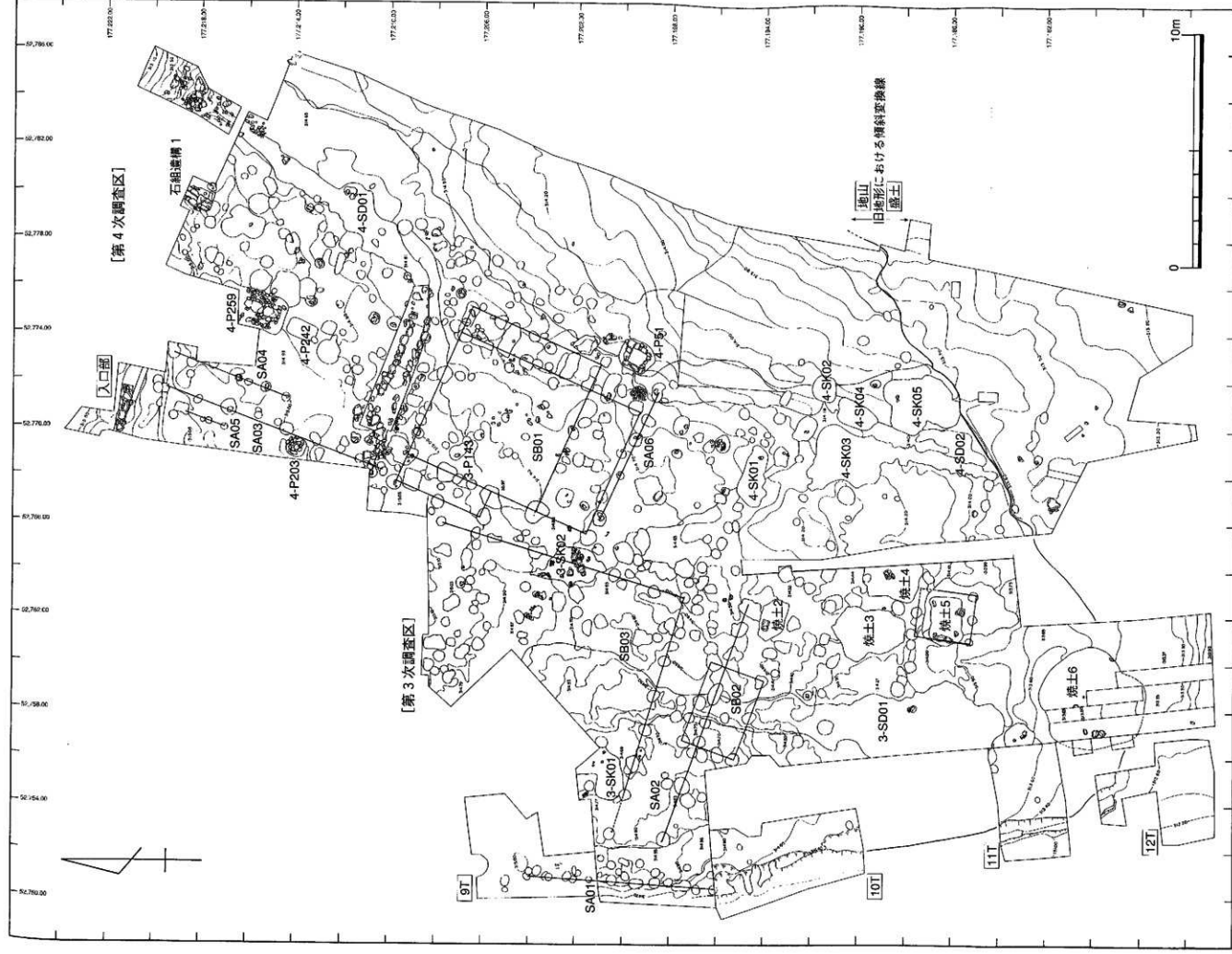
第3節 調査日誌

〔平成10年度〕

- 6月8日 機材搬入。起工式。調査区設定(1～4区)。荒掘り開始。
- 6月9～12日 各区荒掘り、精査。5区設定。
- 6月15～16日 6、7、8区設定、荒掘り。1～4区の遺構検出。6区で石列検出。
- 6月17日 遺構検出。県文化課木本元治氏来跡指導。
- 6月18～24日 遺構検出。中央ベルトのセクション実測
- 6月29日～7月13日 遺構番号を設定し遺構の半裁、セクションの実測。
- 7月6日 焼土6の底部より炭化材、漆塗り木製品出土。
- 7月14日 鈴木啓先生来跡指導。掘立柱建物跡の検討。
- 7月15～17日 遺構表示等、写真測量の準備。写真測量。
- 7月18日 現地説明会。約80人参加。
- 7月21～24日 埋め戻し。

〔平成11年度〕

- 6月4日 トレンチ設定。
- 6月7日 機材搬入。重機で表土を剥ぐ。
- 6月8日 起工式。重機で表土を剥ぐ。A区を8つに分けて荒掘り開始。
- 6月9～15日 各区の荒掘り、精査。
- 6月21～28日 精査、遺構検出。
- 7月1日～8月5日 遺構番号を設定し、半裁、セクション図作成。
- 7月10～14日 雨のため中止。
- 7月30日 鈴木啓先生来跡指導。
- 8月5日 北垣聰一郎先生、県文化課木本元治氏来跡指導。



第4図 二本松城址第3・4次調査遺構配置図

- 8月6日 田中正能先生来跡指導。
- 8月7日 遺構のレベリング、遺構表示
- 8月8日 現地説明会。約60人参加。
- 8月9～10日 9～10トレンチの平面図作成。写真測量。
- 8月11～12日、18～21日 人力、重機による埋め戻し。

第4節 調査方法と概要（第4図）

全体的に平坦で南に狭い台形を呈した平場で、北から南へ緩やかに傾斜する。南北の比高差は約2mを測る。中央に南北に走る通路があり、これを境に便宜上東地区、西地区に分け、平成10年度は西地区を、平成11年度は東地区を中心に発掘調査を実施した。

西地区では掘立柱建物跡2棟、柵列跡2条、溝跡2条、土塼3基、焼土遺構6基、ピット180基が検出されている。掘立柱建物跡は桁行5間、梁行6間のものと、桁行2間、梁行1間の小規模のものが確認されている。東地区では、掘立柱建物跡1棟、柵列跡4条、溝跡1条、土塼5基、敷石遺構1基、石組遺構2基、ピット290基が検出されている。掘立柱建物跡は桁行4間、梁行3間の東西両側に庇を持つ建物である。

これらの遺構はほとんどが平場の北側に集中し、土塼、焼土遺構は南側に集中する傾向が見られた。また、南側は急激に落ちていく自然地形を盛土して平場を確保し、整形したことが確認でき、このことから主要な建物跡は北側に集中していることが納得できる。

基本層序は3層でL1：表土及び耕作土、L2：茶褐色土、L3：山砂層(地山)の順に堆積するが、東地区の地山は山砂層のほかローム状の粘性土、火砕流が堆積したもの等がみられ、複雑である。また、平成11年度の調査区においては、北側入り口付近の一部には柱穴を埋めて整地している状況が見受けられた。

調査は任意にいくつかの調査区を設定し実施している。南北に長い調査地であるため東西に2つ、南北に3つ、計5つに区分した。西地区では石碑前を1区、その東側を2区、1区の南側に3区、その東側が4区、3区の南側から平場端までを5区と設定し、焼土6は5区に検出された。さらに2区の北東に6区を設定したが調査の進捗状況により次年度に調査を実施することとして埋め戻した。これが東地区におけるA1区に相当し、4-SD01の石溝部分にあたる。また、1区の西側を平場端まで拡張し、これを7区とした。さらに2区の北側拡張部を8区とし調査を実施した。東地区においても同様の方法で全体を8区分し、それぞれA1～A8区とした。さらにA1区北側拡張の平場入口部分を西からB・C・D区とし、4-SD01の延長を確認するためA2区を北側に拡張しE区とした。さらに西地区7区の北側に9区（トレンチ）、南側に10～11区（トレンチ）を設定した。

第4章 調査結果

第1節 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(SB01) (第5・6・17・18・20図、巻頭図版2、図版2・1・8・9、第2表)

調査地域北部、平場中央に検出された遺構である。桁行4間(南北8.4m)、梁行3間(東西5.7m)2面庇の建物である。東側には桁行より1間分少ない幅3尺(1.2m)の庇がつき、西側にも幅4尺(1.2m)の張り出し部分が北側から2間分みられる。南側1間は間仕切りがあった可能性がある。柱間は梁行が西から5尺(1.5m)、8尺(2.4m)、6尺(1.8m)、桁行が南から8尺(2.4m)、7尺(2.1m)、7尺(2.1m)、6尺(1.8m)を測る。ただし東側の桁行は南より8尺(2.4m)、10尺(3.0m)、5尺(1.5m)、5尺(1.5m)を測り庇も同様の柱間を測るようである。

出土遺物は3-P139から淡青灰色釉の施された18世紀後半の大堀相馬焼(第17図1、図版8-1)が出土している。底径3.8cm、残存高5.2cm、口唇部は欠損しており体部もほとんどが残存していないため、詳細は不明である。高台より1cm上まで施釉されている。3-SD01出土遺物と同一個体であるため、当遺構と3-SD01とは同時期の所産とみられる。3-P138の下層からは中国産(広東省漳州)の染付碗の腰部(図版9-1j)が検出されている。16世紀末〜17世紀前半に位置付けられるものである。3-P149からは天目茶碗の口縁から胴部にかけての破片(図版9-1k)が1点検出されている。黒茶褐色の釉が内外面ともに施されるが、胴部下半では外面が無釉となる。17世紀前半の美濃である。さらに非常に小片であるが土師質土器片2点、釘(第20図12)1点が検出されている。4-P81からは炭化物ブロックが検出されている。4-P143からはかわかけ片1点が検出されている。4-P72では陶磁器片10点、そのうち本郷産の搦鉢1点、相馬産の小碗5点が検出された。第18図3(図版8-5)に示した肥前的小皿1点は、口径10.7cm、器高2.7cm、底径5.5cmを測り淡青色の染付がみられる。その他かわかけ片4点が検出されている。

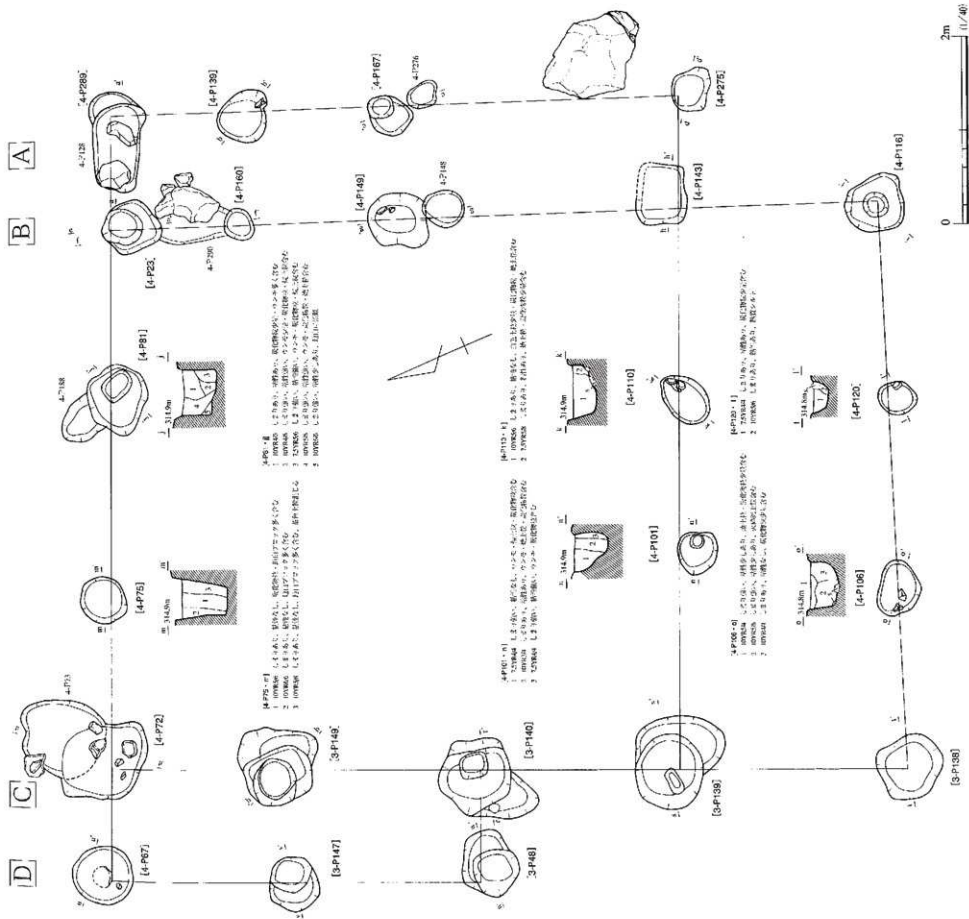
なお、SB01を構成する遺構ではないが3-P149の南側に営まれた3-P143からは柱材とみられる炭化材が検出されている(第11図、図版3-3、4)。樹種および年代の分析結果については付章を参照されたい。

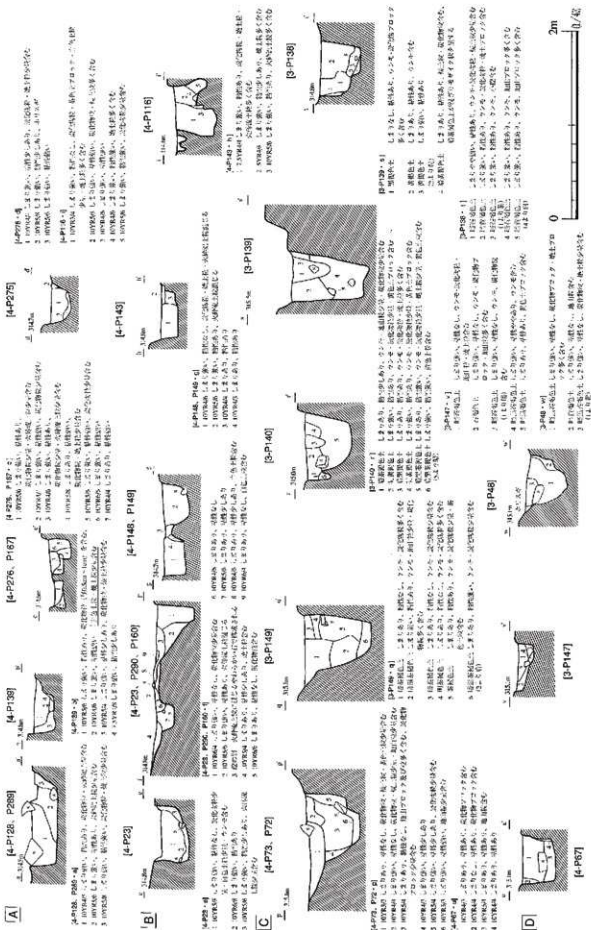
以上のことから、当遺構は18世紀後半の時期に位置付けられよう。また、平場の中心地に位置することや、その規模・構造からもこの平場の中心的建造物とみられる。

2号掘立柱建物跡(SB02) (第7図)

調査区中央やや西側に検出された桁行2間、梁行1間の東西棟の掘立柱建物跡である。柱間は桁行が6尺(1.8m)、梁行が7尺(2.1m)であるためそれぞれ3.6m×2.1mの規模を測る。非常に小規模な建物であり用途は不明である。出土遺物はなく、時期等は不明である。

第5図 S B 0 1 実測図





第6図 SB01 断面図

3号掘立柱建物跡(SB03) (第8・17図、図版8)

SB02の北側およびSB01の西側に位置する建物で南東部のみ確認され、北西部は既存の石碑等により確認できない。東西6間・9m、南北5間・10.8mが確認され東西は7間・10.5mになる可能性もある。東西の柱間は5尺(1.5m)と揃っているが、南北の柱間は南から4尺(1.2m)、6尺(1.8m)、12尺(3.6m)、9尺(2.7m)、5尺(1.5m)と統一されていない。

出土遺物は3-P50上層よりかわらけ(第17図2、図版8-2)が検出されている。底径6cm、残存高1.15cmで底部のみが残存する。ロクロ成形で底面をわずかに造りだしている。18世紀後半に位置付けられよう。また3-P63からは小片の土師質土器片1点、3-P61から瓦片1点が検出されている。

以上のことから当遺構は18世紀後半の年代が与えられるが、3-SD01よりは古いことが確認されており、したがって3-SD01と同時期とみられるSB01よりは古いことが明らかである。また全体の規模・構造とも不明であるが1辺10m以上という大規模な建造物であり、SB01に先行する当平場の中心的施設と推測される。

(2) 柵列跡

1号柵列 (第9・17図、巻頭図版3-1、図版1-2)

調査区西端北より検出された南北に長い柵列である。遺構のすぐ西側から急激に傾斜するため、平場の落ち際に構築された柵列であることがわかる。平成10年度に5間・約4.5mが検出されていたため、平成11年度にはその北側に9トレンチ(9T)、南側に10Tおよび11・12Tを設定して延長を確認した。その結果、北側に4間延びて9間・約8.1mと全長が確認され、柱間は3尺(0.9m)と揃っていることが明らかとなった。なお、南側の10・11・12Tには遺構はほとんど確認されず、このことは柵列が南側には延びずに、平場北側の柱穴が集中する地区のみを開いたことを示唆している。なお、10年度に確認した部分では柵列の基盤が東側平場より小高い状態、すなわち土塁状を呈していた。上幅1.55～1.62m、下幅3.15mを測り、柵列はこの上部に営まれた状況であったが、このような地形は9T～12Tでは確認されなかった。

出土遺物はないが第17図7(巻頭図版3-1)に図示したⅢは当遺構付近、3～7区の2層から検出されたもので17世紀前葉の志野織部である。口径(復元径)21.4cm、底径(復元径)13.4cm、器高5.5cmを測り、高さ1cmほどの箱型の高台がつく。内外面とも有段で、口唇部は内面に折れて波状を呈するとみられる。外面はロクロによるへら削りのラインが明確で装飾の効果を意識している。淡黄灰白色の釉が高台外面まで施され、内面には鉄釉でアヤメあるいはカキツバタが描かれ、わずかであるが緑色の釉が流し掛けされているのがわかる。

以上のことから、年代は明確ではないがその構築状況から平場の北部を西側から防御する目的をもった施設であると考えられる。

SB03 土層注記

[3-P160・a]

- 1 緑泥岩褐色土 (より黄) しまりなし、粘性なし、焼土塊・炭化物粒含む
2 緑泥岩褐色土 しまりなし、粘性なし
3 砂質泥岩褐色土 (より黄) しまりなし、粘性なし、地山粒含む
4 砂質泥岩褐色土 しまりなし、粘性なし、地山粒多く含む

[3-P63・b]

- 1 赤土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む、小礫少し混じる
2 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・黄色土粒含む
3 黄砂層褐色土 しまり強い、流石なし、ウソを含む、地山ブロック及び
粒多く含む
4 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む、地山ブロック及び
粒混じる
5 砂質褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む、地山ブロック及び
粒多く含む

[3-P61・c]

- 1 緑土褐色土 しまりあり、粘性なし
2 砂質褐色土 (より黄) しまりあり、粘性なし、地山ブロック・黄色土粒
混じる

[3-P59・d]

- 1 緑土褐色土 しまりあり、流石なし、ウソ・白色土粒少量、炭化物粒
少量含む
2 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む
3 砂質褐色土 (より黄) しまりあり、粘性なし、ウソ・白色土粒含む
4 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・白色土粒多く含む
5 砂質褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・白色土粒多く含む

[3-P58・e]

- 1 砂質褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・小礫含む

[3-P57・f]

- 1 砂質褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む、黄色土ブロック少量
含む
2 砂質褐色土 しまり強い、粘性なし、ウソを含む、地山ブロック多く含む
3 砂質赤褐色土 しまり強い、粘性なし、ウソを含む

[3-P64・g]

- 1 砂質褐色土 しまり強い、粘性なし、ウソ・炭化ブロック
多、地山粒少量含む
2 砂質赤褐色土 しまり強い、粘性なし、ウソを含む
3 砂質褐色土 (より黄) しまり強い、粘性なし、ウソを含む
4 砂質褐色土 (より黄) しまり強い、粘性なし、ウソ・炭化ブロック・
地山粒含む
5 砂質赤褐色土 (より黄) しまりあり、粘性なし、流石ブロック混じる、ウ
ソ・黄色土粒少量含む
6 砂質赤褐色土 しまり強い、粘性なし、ウソ・地山粒・炭化物
粒多く含む

[3-P50・h]

- 1 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ少量・地山粒多く含む
2 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし
3 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、黄色土粒少量含む

[3-P105・i]

- 1 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・地山粒(径0.5cm)・黄色土
粒少量含む
2 砂質褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・炭化土粒少量含む
3 砂質褐色土 しまり強い、粘性なし、ウソを含む、地山粒及びブロッ
ク多く含む

[3-P134・j]

- 1 砂質褐色土 しまりあり、粘性あり、ウソ・炭化物粒含む

[3-P31・k]

- 1 砂質赤褐色土 しまりなし、粘性なし、ウソ混じる
2 黄褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ混じる
3 砂質褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ混じる

[3-P25・l]

- 1 砂質褐色土 しまりあり、粘性なし、炭化物粒・焼土粒・黄
色土粒少量含む
2 砂質赤褐色土 (より黄) しまり強い、粘性なし、流石・炭化物粒含む
3 砂質赤褐色土 しまり強い、粘性なし
4 砂質赤褐色土 (より黄) しまりあり、粘性なし、ウソを含む

[3-P145・m]

- 1 砂質赤褐色土 しまり強い、粘性なし、ウソ・地山粒多く含む
2 赤褐色土 しまり強い、粘性あり、ウソ・炭化物粒・焼土多く含む
3 砂質褐色土 しまり強い、粘性強い、ウソ・地山粒含む

SA02 土層注記

[3-P69・n]

- 1 砂質赤褐色土 しまり強い、流石なし、ウソ・流石ブロック含む
2 砂質赤褐色土 しまり強い、粘性なし、ウソを含む、小礫(径0.1cm)混じる
3 砂質赤褐色土 しまり強い、流石なし、ウソを含む
4 砂質褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む

[3-P70、P71・o]

- 1 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・白色土粒少量含む
2 砂質褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む
3 砂質褐色土 しまりあり、流石なし、ウソ・地山ブロック含む
4 砂質褐色土 (より黄) しまりあり、粘性なし、ウソ・流石粒含む
5 砂質褐色土 (より黄) しまりあり、粘性なし、ウソ・流石粒多く含む
6 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・流石ブロック含む

[3-P75・p]

- 1 砂質褐色土 しまり強い、粘性なし、ウソ・地山粒多く含む
2 砂質赤褐色土 (より黄) しまり強い、粘性なし、ウソ・地山粒少量含む

[3-P80、P81・q]

- 1 砂質褐色土 しまりなし、粘性なし、ウソを含む
2 砂質褐色土 (より黄) しまりなし、粘性なし、ウソ・流石粒含む
3 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む、地山粒及び
ブロック多く含む
4 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む
5 砂質褐色土 (より黄) しまりあり、粘性なし、ウソを含む

[3-P88・r]

- 1 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む、砂質土
2 砂質褐色土 しまりあり、流石なし、ウソ・流石ブロック多く含む

[3-P105・s]

- 1 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・炭化物粒含む
2 砂質褐色土 しまり強い、粘性なし、ウソ・流石粒含む
3 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む
4 砂質赤褐色土 (より黄) しまりあり、流石なし、ウソを含む
5 砂質褐色土 しまり強い、流石なし、ウソ・流石粒含む
6 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソを含む

[3-P99・t]

- 1 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・流石・炭化物粒少量含む
2 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・流石ブロック多く含む
3 砂質赤褐色土 しまりあり、粘性なし、ウソ・流石少量含む

2号柵列 (第8図)

前述のSB02と重複し桁行に沿って東西に延びる柵列である。全長は8間10.8mを測り、柱間は東から4尺、4尺、5尺、5尺、5尺、5尺、4尺、4尺となり規則性が見受けられる。

出土遺物は3-P69から厚さ1.6cmほどの平瓦片2点が検出され、3-P75からは瓦片1点、土師質土器片1点出土しているが、いずれも小片で詳細は不明である。3-P70からは瓦片5点、磁器片1点出土している。

時期は不明であるが、主軸がSB03とほぼ平行していることから、これに伴う可能性が高い。

3号柵列 (第9図、巻頭図版2、図版1-1)

調査区中央北よりに検出された遺構で、ほぼ南北に6間・約9.9m確認できた。柱間は北から5尺(1.5m)、5尺、8尺(2.4m)、5尺、6尺(1.8m)、4尺(1.2m)と一定ではない。

出土遺物はなく、時期は不明である。

4号柵列 (第9図、巻頭図版2、図版1-1・2-3)

3号柵列の東側に平行して検出された遺構で4間・約5.1mを測る。3号柵列と北端をそろえて営まれ、柱間は北から3尺(0.9m)、7尺(2.1m)、4尺(1.2m)、3尺(0.9m)と様々であるが、3号柵列に比して狭い傾向にある。両者の間隔は5尺(1.5m)を測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

5号柵列 (第9図、巻頭図版2、図版1-1)

3号柵列の西側に平行して検出され、2間・1.8m確認された。柱間は各3尺(0.9m)で、3号柵列との距離は0.7mを測る。

出土遺物はなく、時期等は不明である。

6号柵列 (第9図、図版2-2)

調査区中央、前述のSB01の南側に検出された東西に長い柵列である。4間・6m検出され、柱間は東から4尺(1.2m)、3尺(0.9m)、6尺(1.8m)、7尺(2.1m)と一定していないが、柱穴内に石を用いるなどの共通点がみられる。

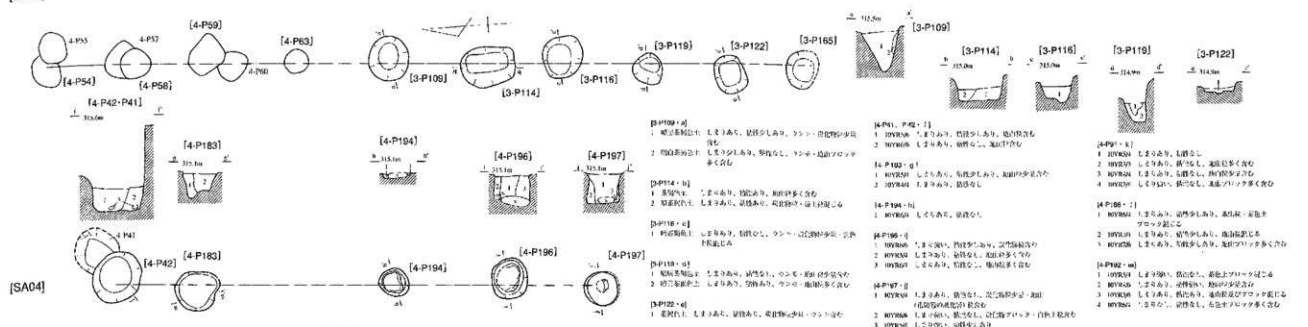
出土遺物はなく、時期等は不明である。SB01と近接し方向が異なっていることから、これと同時期の遺構ではないことがわかるものの新旧関係は不明である。

(3) 溝跡

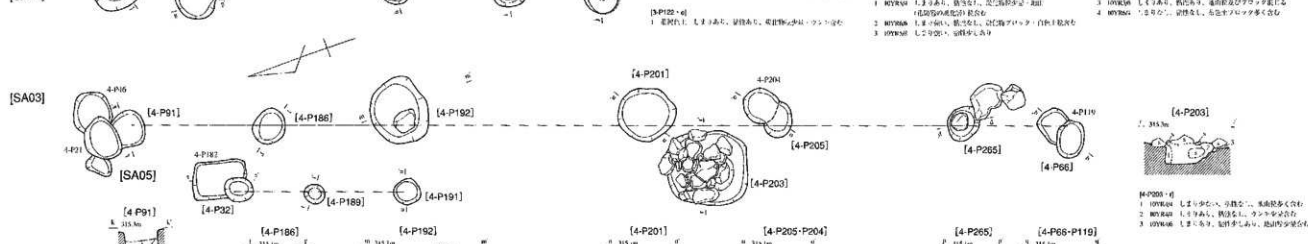
3-SD01 (第4・7・8図、図版8・10、第5表)

平成10年度に検出された南北に延びる溝で、確認長で20.7mを測る。北端及び南端とも調査区外のため不明であるが、両者とも西へ湾曲する傾向を示す。上幅は1mから3mを測り、両端に向かうにつれ幅が広がる傾向にある。深さは最大30cmを測るが、内面は凹凸が激しい。比較的東側は緩やかに立ち上がり、西側は角度を急にする傾向が見られる。また、遺構底面より

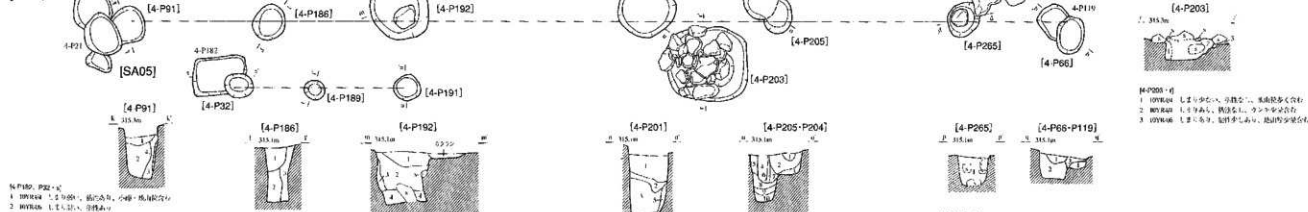
[SA01]



[SA04]



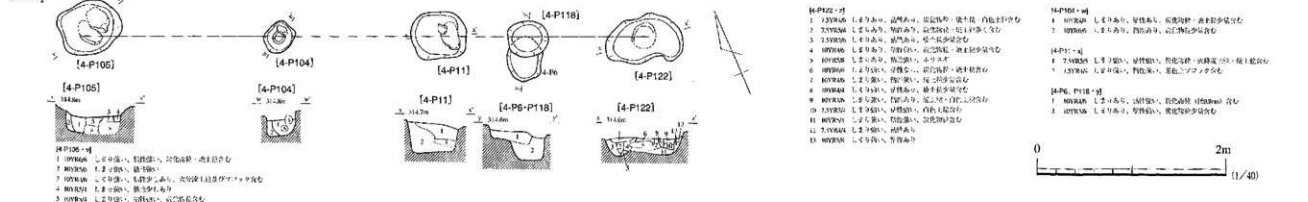
[SA03]



N. P. 182, P. 2



[SA06]



第9回 SA01・SA03・SA04・SA05・SA06 実測回

SB03、SB02、SA02を構成する柱穴が検出されていることから、これらの遺構よりは新しいことが明らかである。

出土遺物はかわらけ片3点、染付のみられる磁器片2点、平瓦1点、赤焼の瓦片1点、碁石1点(図版10-3)が検出されている。碁石は不整円形で、直径16.8mmをはかり白用とみられる。また前述したが18世紀後半の大堀相馬焼(第17図1、図版8-1)が検出されており、これによりSB01と同時期であることがわかる。

以上のように18世紀後半の時期に比定され、これの存在によりSB03、SB02、SA02がSB01に先行することがわかる。しかし形状が不整形であり、機能等は明確ではない。底面が南に傾斜する傾向がみられることから、排水施設である可能性も考えられよう。

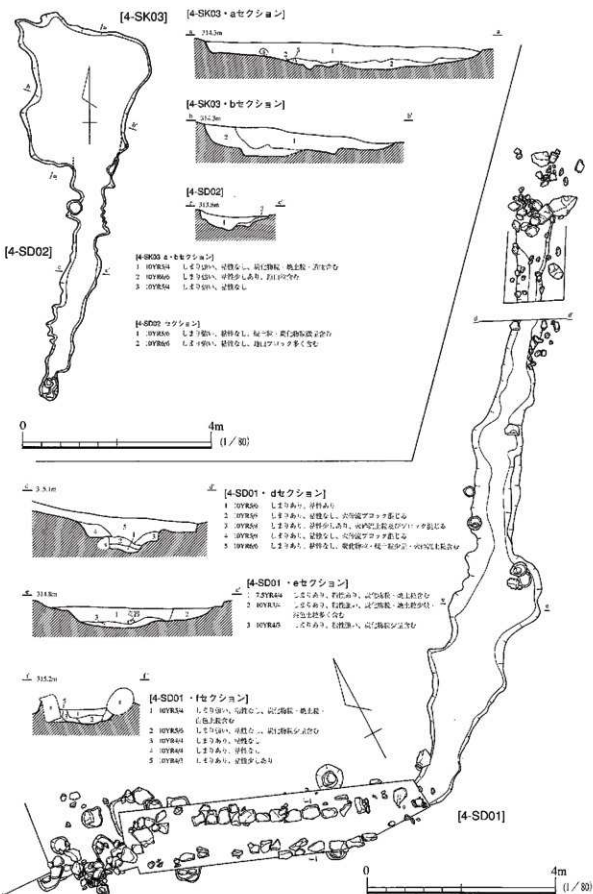
4-SD01(第9・10・17図、巻頭図版1-3・3・4、図版9・10、第2・5表)

平成10年度に6区で確認され、平成11年度にA1、A2区として検出した遺構である。東西に約6.1mを測り、西端は集石遺構にあたり、東端は北側に約72°折れ、約12m測って平場北端に達し、そのまま平場外へ落ちていく状況である。底面の勾配からも西から北へ向かって流れる状況であったことが確認されている。東西に走る南辺の溝のみが石を用いており、南北部分、すなわち東辺の溝は素掘りである。石は直径約30～40cmのものをを用い、幅約50cmになるよう石を据え、深さは30～35cmを測る。東辺の素掘り部分は幅約70cm、深さ約23cmを測る。東辺北端の落ち際及び直下には小礫が密集しており、暗渠状を呈していたものとみられる。また、南辺西端の状況は北側の石列が南側にカーブしているとも観察でき、あるいは溝は南に方向を変えて続いていた可能性も考えられる。

出土遺物は瓦片2点、本郷2点が検出され、内1点は播鉢(図版9-1m)である。また相馬が6点検出されており、内1点は18世紀後半とみられる(第17図4、巻頭図版4-2)。口径11.2cm、底径3.8cm、器高7.5cm、高さ0.6cmの箱型の高台がつく。器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。高台際まで淡緑灰色の釉が施され、口縁部内側はさらに濃い緑色を呈する。その他不明磁器片2点、土師質土器片2点検出されているが小片であり、詳細は不明である。

また、この石を用いた溝の北側、後述する整地層内からは遺物が集中して出土した。播鉢2点内1点は岸、陶磁器片24点、内9点は相馬、3点は京焼陶器、9点は産地不明の染付けである。いずれも小片ばかりであるが、図示できた第17図5(巻頭図版4-5)は相馬産の小碗である。口径約8.3cm、底径約3.5cm、器高5.65cmを測り、高台を除いて内外面ともに暗緑茶色の釉が施されている。さらにかかわらけ片10点が検出され、第17図6はそのうちの1点である。器高1.6cm、口径約7.7cm、底径約4.6cmを測り、底面の調整がなされていないことが観察できる。また碁石が1点(図版10-3)、釘1点が検出されている。

以上のことから、当遺構は18世紀後半に位置づけられよう。さらに南辺の南方に位置する



第10図 4-SK03・4-SD02・4-SD01 実測図

(平面図は1:80、断面図は1:40)

SB01と主軸を揃えているため、これと同時期の可能性が考えられる。しかし、遺構の形状から南辺より北側を区画していたとみられ、この地区は柱穴を埋めて整地した状況が確認された。さらに整地層上面で検出された4P203(第9図、図版3-2)の集石は根固石とみられ、整地層上面にはおそらく礎石立建造物が存在していたものと思われる。4-SD01の石は整地層より掘えられており、整地の時期は4-SD01以前ではあるが、出土遺物からはほぼ同時期とみられる。整地層はSB01までは延びていないため、新旧関係は不明である。また石を用いた南辺と、素掘りの東辺は一連のプランにあるとはいえ、石の有無という大きな相違がみられ、あるいはSB01に伴う素掘りの溝が先行し、その後整地して南面する部分のみ石を用いて排水溝を営み、東辺は先行する溝をそのまま利用したものとも解されよう。

4-SD02 (第10図、第4表)

平場南東部に検出された南北に長い遺構である。全長約6.2mで、北側は4-SK03と重複し、当遺構が新しい。上幅約73cm、深さ約26cmを測るが、内面は平坦でなく溝幅も一定しない。覆土は2層で焼土を含み、後述する4-SK03の覆土と類似する。

出土遺物は本郷産に似た陶器の底破片が検出されている。高さ6.5mmを測る高台内は削りだされていない。その他産地不明の陶磁器片3点、かわらけ片2点、土師質土器の甕片1点が検出されている。また古銭が1点検出されているが銭文が「〇〇通〇」としか判読できず、破損のため外径も不明である。また直径2.2cmを測る円錐状の鉄製品が1点検出されている。

これらのことから、当遺構の年代、性格ともに不明であり、4-SK03と一連の遺構として考える必要もあるだろう。

(4) 上墳

3-SK01 (第11・20・23図、図版11-1、第2・3表)

調査区北側、1区と7区にかけて検出された。2.3×1.2mを測り東西に長い楕円形を呈し、北東部は攪乱を受けている。深さは約20cmで、底面は平坦であるがやや凹凸がみられる。堆積土はほぼ1層で人為的に埋められたものとみられる。また3P63と切合い、これより古いことがわかる。

出土遺物は瓦片4点、陶磁器片6点のうち肥前が1点、長頸壺の口頸部が1点みられる。また口縁部が折り返された素焼きの大型の甕片が10点検出されており、おそらく同一体のものと思われる。その他かわらけ片4点が検出されている。第20図1は一部欠損しているがヒウチガネである。他に釘9点(第20図2～10)、不明銅製品1点(第23図1)が検出されている。穿孔があり、飾り金具とみられる。時期、性格ともに明確ではない。

3-SK02 (第11図、巻頭図版4)

SB01の西側、SB03の東辺上に位置する。南北に長い不整楕円形を呈し、3.3×1.8mを測る。断面は皿状を呈し、内面は平坦でない。深さは約15cmで瓦が集中して出土した。また遺構上面

には径30～40cmの礫が多く検出されたが、人為的に配置した傾向は見られなかった。

出土遺物は香合（巻頭図版4・7）が1点検出されている。底部長辺が約6.5cm、器高3.75cm、やや口縁部が内傾する直方体で外面に染付けがみられる。18世紀前半の肥前である。ほかに平瓦片4点、播鉢の口縁部3点が検出され、内1点は17世紀中葉～後半の岸である。

以上のことから18世紀前半に位置付けられ、SB01、SB03に先行するものである。したがって、この時期に遡って瓦を用いる建造物が存在したことを伺わせる。

4-SK03（第10・17・20図、図版8・10-1、第2表）

調査区南西部に検出され、前述した4SD02と切り合い本遺構が先行する。南北に長い不整楕円形を呈し、3.2×3.0mを測る。内面は平坦でなく、壁の立ち上がりも明確ではない。深さ29cmを測り、東側から人為的に埋めた状況が観察できた。

出土遺物は京・信楽の碗が1点、産地不明だが表面に突帯をもつ火鉢片が多量に検出された。その他磁器片5点、瓦片34点、播鉢4点が検出され、この内2点は岸である。さらに、かわらけ7点、砥石1点、釘2点（第20図21・23）、焼土塊2点、炭化物ブロックが多く検出された。第17図3（図版8・3）は肥前産の碗である。口径（復元径）13.1cm、残存高5.4cm、胴下半部から底部にかけて欠損している。口唇部直下の外面に浅いくびれがみられる。全体に淡灰茶色を呈し、釉には内外面とも細かな貫入が見られる。

以上のことから、遺構の年代は17世紀後半ごろとみられる。出土した焼土塊はおそらく壁材とみられ、炭化物が多いことなどから焼失した建造物を整理した際の土壌と考えられよう。

4-SK05（SK06,07,08,09,10,11を含む）（第11・20図、第2・4表）

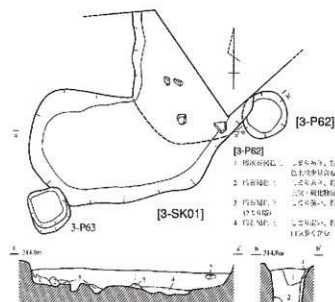
調査区南東部、前述の4SK03のさらに南東に位置する。当初7つの土塊が切りあったような状態で検出されたが、その後の検討で1つの遺構と判断された。3.35×2.65mの不整楕円形を呈する。深さは30～45cmを測り、底面は丸みを帯びやや凹みが見られる。

出土遺物は美濃で焼かれた志野の碗1点、本郷産と見られる小片1点、産地不明の陶器片1点、染付けのみられる磁器片1点、小片であるが土師質土器片9点が検出されている。また土師質土器の碗1点、土師質土器の播鉢片1点が検出されている。金属製品では釘1点（第20図22）、銭文が不明である古銭1点が検出されている。他に炭化物ブロックが多く検出されている。

当遺構はこの平場の中で唯一粘土層が露出している部分に営まれていることから、壁土等に利用するための粘土を採掘した遺構と考えられる。数基の土塊が切り合った状態で検出されたのは、数回にわたって採掘したためと判断された。

（5）焼土遺構

焼土を多く含む土壌を分類した。平成10年度に調査した地区のみで検出された。



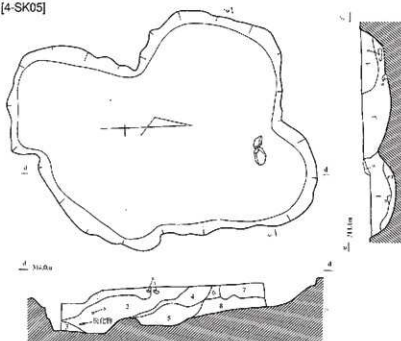
[3-SK01]

- 1 堀削面
- 2 15cm層
- 3 15cm層
- 4 15cm層

[4-SK05 断面図]

- 1 堀削面
- 2 15cm層
- 3 15cm層
- 4 15cm層

[4-SK05]



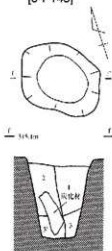
[4-SK05 断面図]

- 1 堀削面
- 2 15cm層
- 3 15cm層
- 4 15cm層
- 5 15cm層
- 6 15cm層
- 7 15cm層
- 8 15cm層

[3-SK02]

- 1 堀削面
- 2 15cm層
- 3 15cm層
- 4 15cm層

[3-P143]



[3-P143]

- 1 堀削面
- 2 15cm層
- 3 15cm層
- 4 15cm層

第11図 3-SK01・3-SK02・4-SK05・3-P143 実測図

焼土3 (第12図、図版9)

調査区南西部やや中央よりに検出され、 $3.15 \times 2.4\text{m}$ の南北に長い不整楕円形を呈し、深さは約54cmを測る。断面形は皿状を呈し自然堆積である。出土遺物は17世紀前半とみられる初期伊万里の皿の底部(図版9-1c)、16世紀末～17世紀頃とみられる唐津産の向付の口縁部(図版9-1d)、16世紀末～17世紀頃の美濃焼の碗(図版9-1b)が検出されている。

以上のことから、当遺構は17世紀前半に位置付けられよう。

焼土4 (第12図、図版9)

焼土3の西側に近接して検出された。平面形は不整楕円形を呈するが、東端は確認されていない。南北2.6m、確認長で東西1.6m、深さは約50cmを測る。他の焼土遺構と比較して焼土の含まれる割合が少ない。内面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は18世紀頃の肥前の碗(図版9-1e)が1点出土し、釘がきで横線や渦巻き文が描かれた口縁部片である。また土師質土器の口縁部片が1点出土し、口唇に炭が付着していることから灯明皿と判断できる。

焼土5 (第12図、図版4-1)

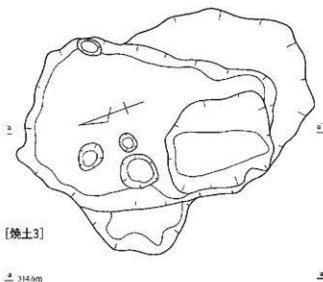
焼土3、焼土4の南側に近接して検出された。南北に長い不整長方形を呈し、約 $3.8 \times 2.8\text{m}$ を測る。深さは45cm程度であるが、遺構底部の北よりの部分にはさらに約 $1.95 \times 1.35\text{m}$ 、深さ約65cmを測る東西に長い長方形プランの土壌が検出された。平面では確認できなかったが、断面から焼土5より新しいことが確認された。長方形プランの壁面は垂直に落ち、床面も平坦である。上部に直径約0.4mを測る礫が数石検出されている。遺構の北側と南側にはピットが3基ずつ並んで検出されており、この土壌に伴うなんらかの施設が存在が想定される。出土遺物はなく、時期は不明である。なお、形状からトイレの可能性が指摘されたため土壌内の覆土について自然科学分析を実施したがその結果に待筆すべきものはなく、トイレである可能性は低い。

焼土6 (第7・13・20図、巻頭図版3-2・3、第2表)

調査区の最南端西よりに検出された遺構であり、直径約4.3m、深さ約1.9mを測る。平面形は円形を呈し、北半ではやや内弯気味であるもののほぼ垂直に落ち込み底面に達するが、南西側では緩やかに傾斜している。また、南東側では約0.45m落ちてテラス状を呈し、再び垂直に落ち込んでいる。したがって、断面形はすり鉢状であるが内面はかなりの不整形を呈している。

焼土6のある調査区南端は、上段平場の南端でもある。この南端部分では、Ⅲ層とした地山が急に傾斜して落ちていく様相が観察でき、その上に0.8～1.2mほどの堆積がみられ、平坦な平場を形成していることが明らかとなった。これが人為的なものか自然堆積かは検討を要するが、焼土6はこの堆積土をきって営まれていることがわかる。

焼土6の堆積土は34層にわけられ、ほとんどが焼土と炭化物を多く含む層で構成されている。さらに、堆積の状況から北側より人為的に埋められた様相が観察できた。

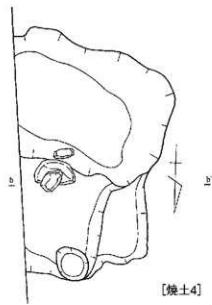


【焼土3】



【焼土3】

- 1 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 2 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 3 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 4 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 5 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む

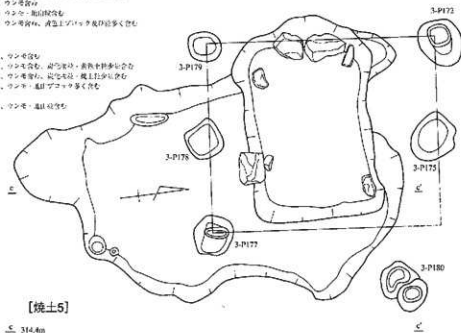


【焼土4】

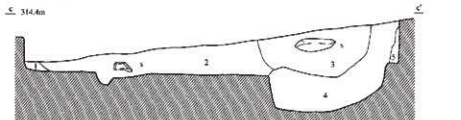


【焼土4】

- 1 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 2 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 3 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 4 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 5 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む



【焼土5】

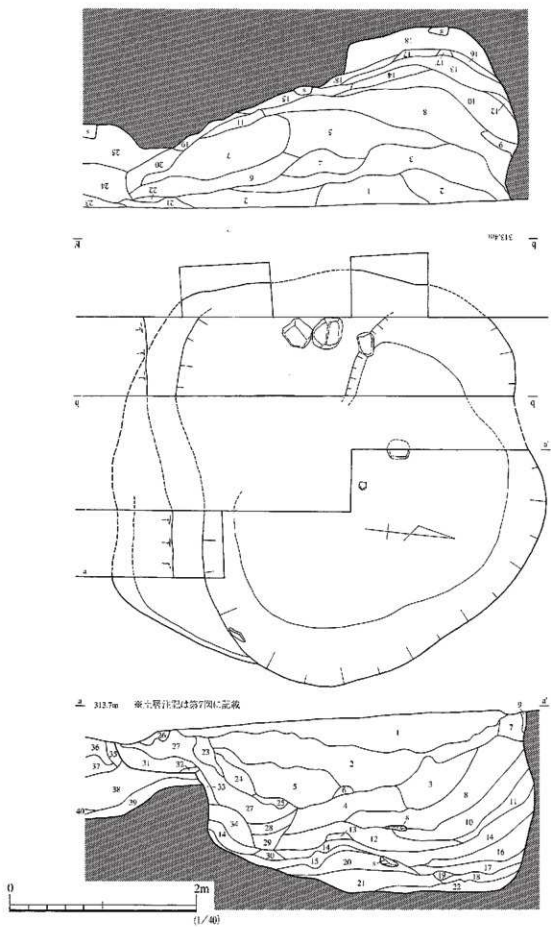


【焼土5】

- 1 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 2 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 3 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 4 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む
- 5 焼土層 土 しまりあり、砂質なし、コンクリート、鉄骨筋・鉄骨柱を含む



第12図 焼土3・焼土4・焼土5 実測図



第13図 焼土6 実測図

出土遺物は陶磁器片4点、鉄製品1点が検出されている。上層からは17世紀末から18世紀前葉の肥前(巻頭図版3-3 a)が検出され、小片だがこんにやく印半がみとめられる。巻頭図版3-3 bは内面底部に呉須による菱文がみられ中国系の製品とみられる。また、下層から検出された巻頭図版3-3 cは内外面ともに青色の染付がみられる。なお、下層からは焼土塊、炭化材、およびカヤ状の炭化物が直径約40cmの範囲に平らに並んだ状態で検出されている。大小様々の焼土塊が検出され、建造物の壁材であると考えられる。細い管状の空洞部が多々みられ、これは壁土に混ぜたスサの痕跡と思われる。また焼土塊の一部には径1.0~1.3cmの棒の匠痕が格子状に残されており、芯に用いた木材の様子がうかがえる。遺構の底部付近では炭化物層がみられ、何種類かの炭化材が検出されている。巻頭図版3-3 dは材質不明であるが建造物の部材の一部と思われ、大きいもので直径7cm以上を測る炭化材が検出されている。また、ナタで切り出した痕跡が残る直径約1.5cm、残存長約23.0cmの棒状の炭化材(巻頭図版3-3 e)もみられる。屋根材等の建築部材の一部と考えられる。巻頭図版3-3 fは竹材で大きいもので直径1.9cm、残存長19.4cmを測る。これも屋根材等建築部材の可能性が考えられる。巻頭図版3-3 gは炭化したカヤとみられる。検出時は1本1本の方向をそろえた状態で検出されており、屋根に葺いた状態のまま埋められたと判断された。また、底面より漆塗りの木製品(巻頭図版3-2)が1点出土している。残存長約14cm、幅約3.5cm、厚さ約0.5cmの直方体を呈している。幣の一部である可能性がある。なお、鉄製品(第20図13)1点は上層から出土し、用途等は不明である。

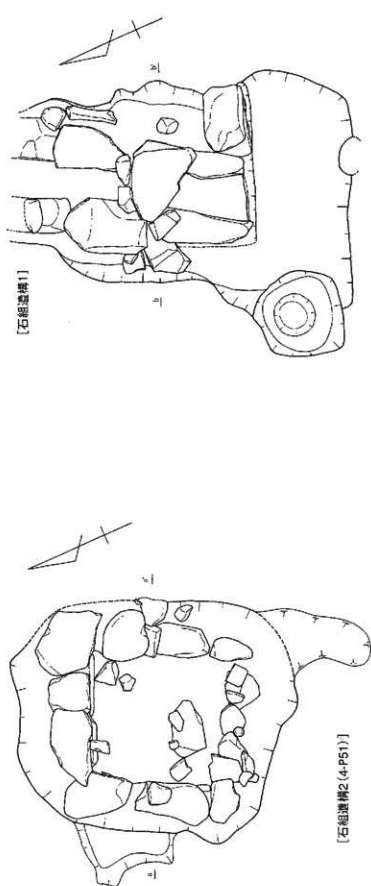
(6) 特殊遺構(敷石遺構・石組遺構)

敷石遺構(4-P259)(第14・20図、図版3-1・6、第2表)

調査区北端中央部に検出された遺構で、北側の平場入口付近に位置する。南北約2.9m、東西約1.5m、平面プランは長方形を呈する。北西部は樹木のため未確認である。深さ約0.35mを測り、底面に楕円形の板状の石を2つ据えていることが特徴的である。北側の石は約85×48cm、南側の石は約65×38cmを測り、いずれも長軸を南北にとる。土壌の底面は水平ではないが、二つの石を水平に据え、これらの周囲を上面が平滑な小礫で囲み、全体として約1.6×0.8mの長方形に形作っている。この上面には約5cmほどの炭化物層が堆積し、石の上面はかなりの熱を受けた痕跡が見受けられることから、この施設で火を用いたと判断された。なお、最上層は火砕流に伴う礫を用いて人為的に埋めた状況が観察できた。

出土遺物は上層より播鉢1点、陶器の底部片1点、上下端とも欠損した釘1点(第20図18)が検出されているが、いずれも小片のため時期等は不明である。

また、この遺構の南側約20cmに隣接して4-P242が検出されている。約1.3×0.7m、平面形は南北に長い長方形を呈し、敷石遺構とほぼ主軸を同じくしている。深さは約0.3mを測り、最下層は約5cmほどの炭化物層であるが遺構内は焼けていない。堆積土の状況から、遺構を掘り込ん



第15図 石組遺構1・石組遺構2(4-P51) 実測図

でからあまり時間をおかず埋め戻した状況が観察できた。また、堆積土中からは板状の炭化物が数片検出された以外に出土遺物はなかった。

石組遺構 1 (第15図、図版 5)

調査区北東端に検出された石組みの水路状の遺構で、約17~25cm間隔で直方体の石を2つ縦に据え、側壁としたものである。一部、上部に平坦な石がのせてあり暗渠状を呈していたことがわかる。調査区北端の部分では北側から傾斜してくる地山層がみられ、それを切り込んで平場を造りだしており、当遺構はこの掘り残された地山を平場の高さまで約40cm掘り込んで作られている。側壁に用いた石は3石分120cmが確認され、北端の土塁内へ続き、その北側にこの延長と見られる石が確認されている。したがって当施設は土塁を南北に貫いて構築されているとみられる。

出土遺物はみられず、時期等は不明である。その構造等から土塁北側へ流れる暗渠状の水路である可能性が高い。しかし、この水路が北側への排水を目的にしているとするれば、どの部分の水がここへ流入するか不明確であり、雨水の排水のみが目的であるか否か現状からは判断し得ない。

石組遺構 2 (4-P51) (第15図、図版 5・9・2 d~f、第5表)

調査区中央に4-P51として検出した遺構で、SB01の南東隅に位置する。約138×123cmのやや南北に長い方形の平面プランを呈し、深さは約50cmを測る。内部は石を3段ずつ組んでいるが底部から約8~10cmは石を組んでいない。その内径は1辺約65cmの正方形を呈する。上部には長径約35cm、下部には長径約20cm弱の小さい石を用いていることが特徴である。石組みの南東隅は擾乱により底部近くまで破壊を受けている。

出土遺物は瓦片1点、岸産の鉢片1点、4層上から不整形の基石が1点、50.4gほどの鉄宰塊1点があり、このほか用途不明であるが斧状に加工した石製品の破片が検出されている。

以上のことから時期は17世紀後半に位置づけられ、用途は貯蔵庫的なものと考えられる。

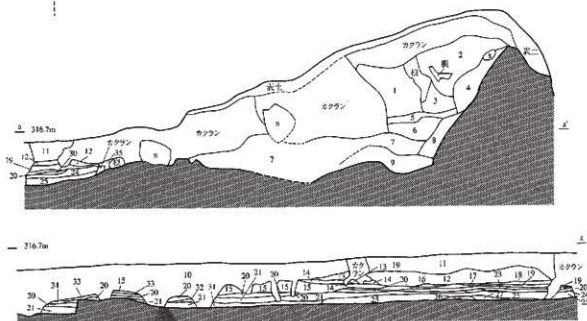
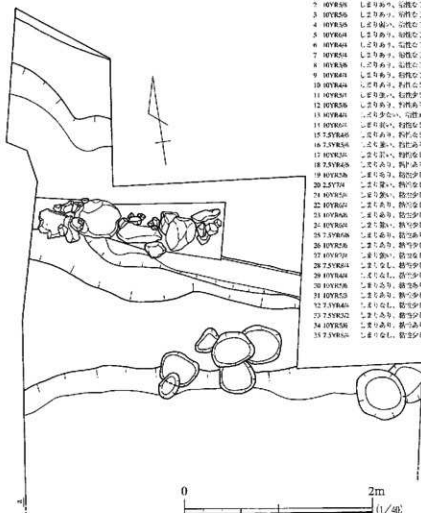
(7) 平場入口付近(第16・18図、巻頭図版4、図版11)

本平場の北側入口は地形的に考えて本丸等との連絡路としての機能が予想されたため、その構造を解明するため調査区を拡大した。この地区は地山(花崗岩層)が検出され北から南へ大きく傾斜することがわかる。平場はそれを削平して形成され、その北側に東西に走る城内路もまた地山をやや掘り込んでいることがわかる。この2区間の間の掘り残された地山が土塁の基盤を形成している。なおこの土塁の南側、つまり平場北端は深く掘り込まれ、直径約40~50cmの石が4個土塁に沿って東西に一列に並べられている。

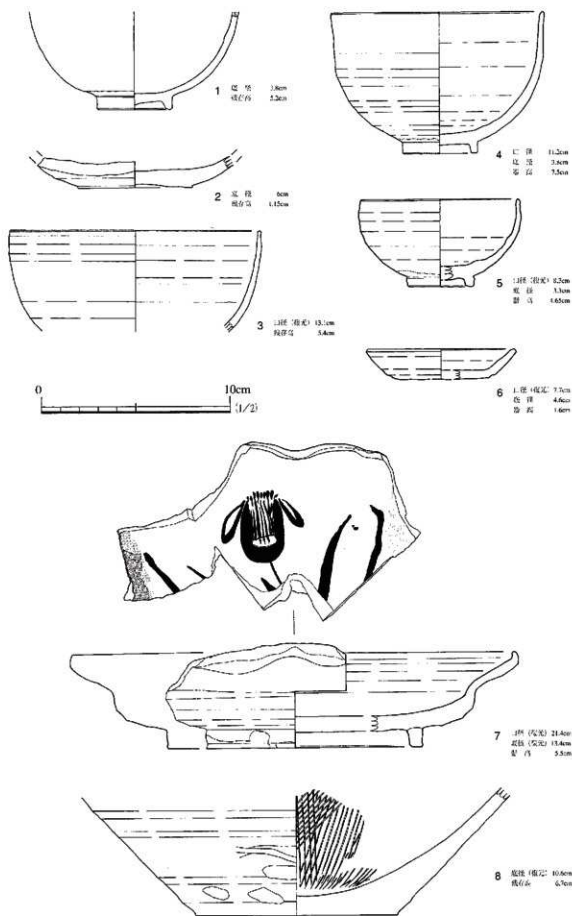
出土遺物は土師質土器の小片1点、第18図7(巻頭図版4-6)に示した青磁の皿1点である。後者は底径6cm、残存高2.45cm、高台から底部にかけて残存し、内面に文様がみられるが破片のため形状は不明である。

【B区・A1区面壁セクション】

- 1 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 2 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 3 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 4 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 5 10YR6/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 6 10YR4/4 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 7 10YR5/4 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 8 10YR3/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 9 10YR4/3 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 10 10YR4/4 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 11 10YR5/3 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 12 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 13 10YR4/3 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 14 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 15 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 16 7.5YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 17 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 18 7.5YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 19 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 20 2.5Y/7 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 21 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 22 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 23 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 24 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 25 7.5YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 26 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 27 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 28 7.5YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 29 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 30 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 31 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 32 7.5YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 33 10YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む
- 34 7.5YR5/6 しまり強い、赤褐色、鉄土砂・泥炭質・火山灰多量含む

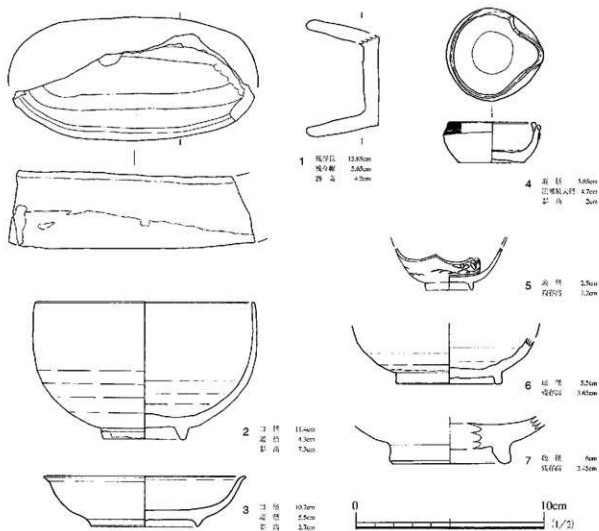


第16図 B区【平場入口部】実測図



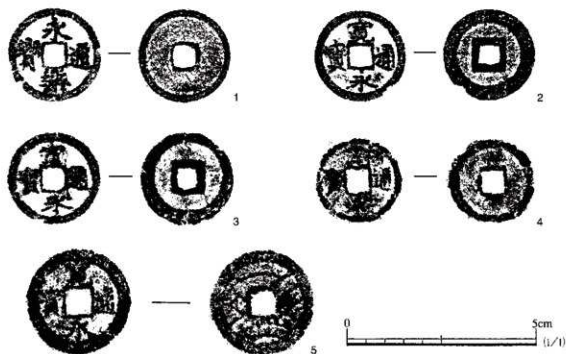
第17图 出土文物 (1) 陶磁器類

1—3-P 139・3-SD01 (区画8-1)、2—3-P 50 (同区8-2)、3—4-SK03 (同区8-3)、
4—4-SD01 (参照同区4-2)、5—4-SD01附近 (参照同区4-5)、6—4-SH01北
7—3-7区SA01 (参照同区3-1)、8—3-P 89 (同区8-4)



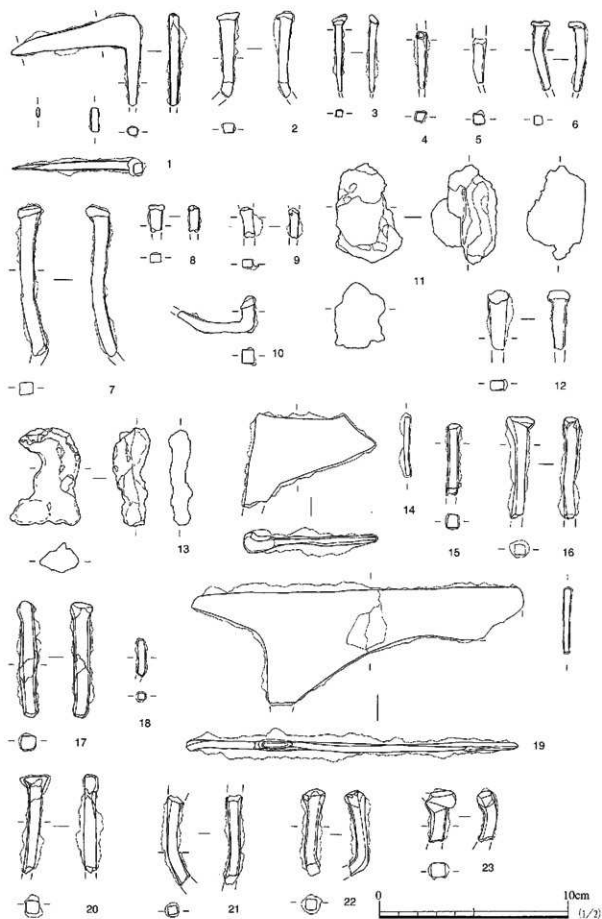
第18圖 出土遺物 (2) 陶磁器類

1—3-P45 (參照圖版4-4)、2—4-P69 (參照圖版4-1)、3 4-P72 (圖版8-5)、
4—4-SD01附近 (圖版8-6)、5—3-P62 (圖版8-7)、6—4-A4區 (參照圖版4-3)、
7—4-B區 [入]部 (參照圖版4-6)



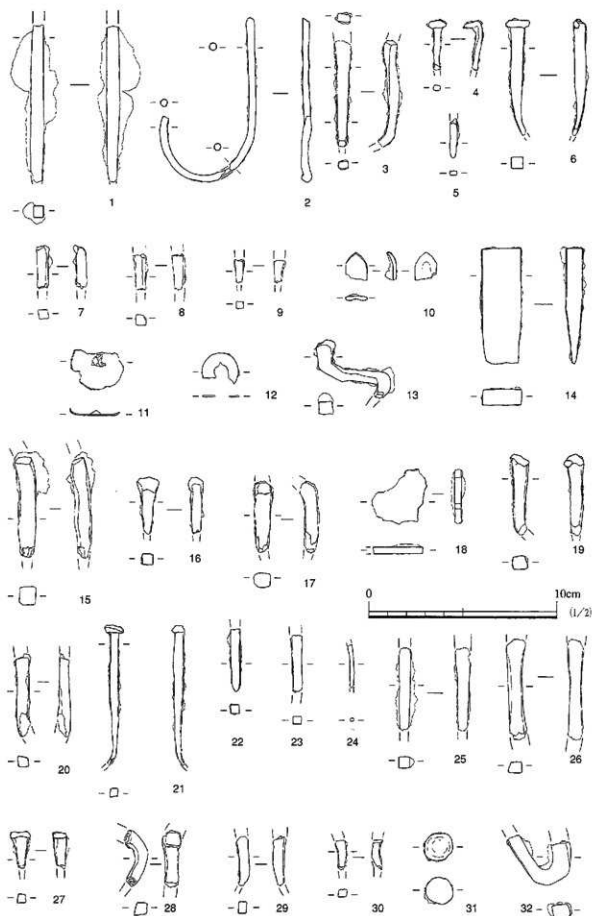
第19圖 出土遺物 (3) 古錢

1—3-1區、2—3-P29、3 3-8區、4—3-6c區、5—4-A5·6區



第20図 出土遺物(4)鉄製品：遺構内

1～10-3-SK01, 11-3-P62, 12-3-P149, 13-遺構上, 14-4-P72, 15-4-P100, 16-4-P161, 17-4-P169, 18-4-P259上, 19-4-P259上, 20-4-SK01, 21-23-4-SK03, 22-4-SK09

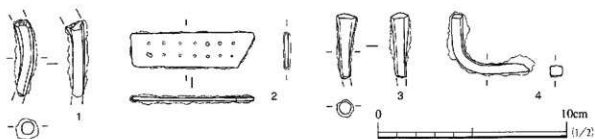


第21図 出土遺物(5)鉄製品：遺構外①

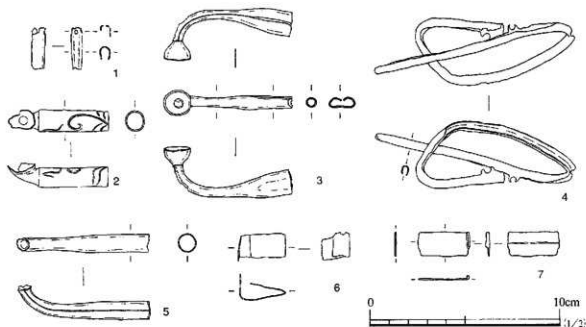
1-3-1区1層、2-3-2区2層、3-4-3-2区3層上、5-3-1-2区1層、
6-3-1-3区1層、7-12-3-2-4区1層、13-3-5区2層斜瓦、
14-3-5区1層、15-18-3-6区2層、16-17-19-20-3-6区雙池層、
21-24-3-1-8区3層上、25-27-3-8区3層、26-28-32-3-8区3層上

第2表 出土遺物観察表(鉄製品)

図版番号	採回番号	遺物名	出土地点:層位	規格(mm)			関連遺構	備考
				長さ	太さ	重さ(g)		
第20図-1	図版11-1 a	ヒウチガネ	3-SK01	64×48.5×5.5	16			一部欠損
第20図-2		釘	3-SK01 上層	44.5	5.5×5.0	5		下端欠損
第20図-3	図版11-1 b	釘	3-SK01 上層	41	3.4×3.4	2		下端欠損
第20図-4		釘	3-SK01 上層	30.5	5.0×4.5	2		上下端とも欠損
第20図-5		釘	3-SK01 上層	24.5	6.0×5.0	-		上下端とも欠損。実測後に損壊
第20図-6		釘	3-SK01 上層	37	4.5×5.0	4		下端欠損
第20図-7	図版11-1 c	釘	3-SK01 上層	79.5	7.5×7.0	17		下端欠損
第20図-8		釘	3-SK01 上層	15	5.7×4.5	2		下端欠損
第20図-9		釘	3-SK01 上層	16.5	5.5×4.5	2		上下端とも欠損
第20図-10		釘	3-SK01 上層	41	6.5×7.0	-		下端欠損
第20図-11		不明鉄製品	3-P62 中層	53	35.5	35		
第20図-12		釘	3-P149 下層	31.2	7.5×5.5	8	SB01	下端欠損
第20図-13	図版11-1 d	不明鉄製品	3-焼土 6 上層	51.5×37.5×18	30			
第21図-1		釘	3-1区 1層	83	5.5×6.5	27		上下端とも欠損
第21図-2	図版11-1 i	釘	3-2区 2層	87×50.5	3.5	9		鈎ガネ状
第21図-3		釘	3-2区 3層上	56	7.0×4.0	6		上下端とも欠損
第21図-4		釘	3-2区 3層上	26	3.5×3.0	2		下端欠損
第21図-5		釘	3-1-2区 1層	21	4.0×2.5	1		先端部
第21図-6	図版11-1 k	釘	3-1-3区 1層	61	6.5×6.0	9		下端欠損
第21図-7		釘	3-2-4区 1層	23	5.5×5.0	2		下端欠損
第21図-8		釘	3-2-4区 1層	19	5.5×5.8	1.5		上下端とも欠損
第21図-9		釘	3-2-4区 1層	12	4.0×4.0	0.5		上下端とも欠損
第21図-10		不明鉄製品	3-2-4区 1層	15×11.5×1.8	1			
第21図-11		不明鉄製品	3-2-4区 1層	21×28×0.6	-			実測後に損壊
第21図-12		不明鉄製品	3-2-4区 1層	19.5×16.5×0.6	-			実測後に損壊
第21図-13	図版11-1 l	釘	3-5区 2層斜直	39	7.5×6.5	10		両端欠損
第21図-14	図版11-1 n	クサビ	3-5区 1層	60.5	20.5×8.5	59		
第21図-15		釘	3-6A区 2層	53.5	8.5×9.5	13		上下端とも欠損
第21図-16		釘	3-6A区 2層	30.5	5.5×6.0	3		下端欠損
第21図-17		釘	3-6A区 2層	37	8.5×8.0	5		上下端とも欠損
第21図-18		不明鉄製品	3-6C区 2層	27×29.5×3.5	7			
第21図-19		釘	3-6C区 2層	43	8.0×7.5	5		下端欠損
第21図-20		釘	3-6D区 2層	42	5.5×5.5	4		上下端とも欠損
第21図-21	図版11-1 o	釘	3-1-8区 3層上	74.5	4.5×4.5	6		下端欠損
第21図-22		釘	3-1-8区 3層上	33	4.5×4.7	3		下端欠損
第21図-23		釘	3-1-8区 3層上	30	4.5×4.0	3.5		上下端とも欠損
第21図-24		針状鉄製品	3-1-8区 3層上	23	2	0.2		上下端とも欠損 断面楕円形
第21図-25		釘	3-8区 3層	44	5.8×6.2	5		上下端とも欠損
第21図-27		釘	3-8区 3層	20	4.8×5.0	3		下端欠損
第21図-28		釘	3-8区 3層上	30	7.0×6.8	3		上下端とも欠損
第21図-29		釘	3-8区 3層上	53.5	7.3×5.8	7		上下端とも欠損
第21図-30		釘	3-8区 3層上	26.2	4.3×6.5	3		上下端とも欠損
第21図-31	図版11-1 m	弾丸	3-8区 3層上	直径15		8		上下端とも欠損
第21図-32		釘	3-2区 3層上	32	9.5×7.0	9		上下端とも欠損
第20図-14	図版11-1 e	不明鉄製品	4-P51	60×50×22	50.4			
第20図-15		釘	4-P72	75×47×4	30			ヒウチガネか?
第20図-16		釘	4-P100	37	4.5×5.5	4		下端欠損
第20図-17		釘	4-P161	53	8.0×8.0	10		下端欠損
第20図-18		釘	4-P169	61	6.5×7.0	13		下端欠損
第20図-19		釘	4-P259上	20	3.5×3.5	1		上下端とも欠損
第20図-20	図版11-1 f	不明鉄製品	4-P266上	174×64×4	95			支のような形状を呈する
第20図-21	図版11-1 h	釘	4-SK01	51	6.0×5.5	5		下端欠損
第20図-22		釘	4-SK03	49	5.0×4.5	5		上下端とも欠損
第20図-23		釘	4-SK03	28	7.5×7.0	4.5		下端欠損
第20図-24		釘	4-SK09	44	6.5×6.0	7		下端欠損
		不明鉄製品	4-SD02	直径22		4		
		釘	4-SD01北	49.5	7.0×6.5	9		下端欠損
		古銭状鉄製品	4-A4 1層	外径23 内径5	4			
		不明鉄製品	4-A4 1層	61×28×14	65			
第22図-1		釘	4-A5 1層	40	8.5×7.0	5.5		上下端とも欠損
		釘	4-A5 1層	40	6.5×6.0	6		下端欠損
		不明鉄製品	4-A5-6 1層	27.5×7.0×5.0	2			U字状に加工されている
		鉄筆	4-A5-6 1層	25×24	16			
		不明鉄製品	4-A6-7 1層	30×9×4.5	2			U字状に加工されている
第22図-2	図版11-1 g	小丸	4-A7 露土層	65×19×1.8	9			
		釘	4-A7 露土層	27.5	4.5×5.5	5		下端欠損
		釘	4-A7 露土層	23	5.0×5.0	3		上下端とも欠損
第22図-3		釘	4-A7-8 1層	32	6.0×5.5	5		下端欠損
		板状鉄製品	4-B・C 1層	50×27.5×5.0	20			
第22図-4	図版11-1 i	釘	4-E 露土	45	4.5×5.5	7		上下端とも欠損
		釘	4-E 露土	40	5.0×6.5	5		上下端とも欠損



第22図 出土遺物 (6) 鉄製品：遺構外② 1-4-A3区1層、2-4-A7区遺土層、3-4-A7-8区1層、4-4-E区表土



第23図 出土遺物 (7) 銅製品 1-3-SK01、2-3-4区1層、3-3-2区2層上、4-4-A7区、5-3-2区3層上、6-7-3-6区1層

第3表 出土遺物観察表〔銅製品〕

拝図番号	図版番号	遺物名	出土地点：層位	規格 (mm)				備 考
				長さ×幅	直径	厚さ	重さ(g)	
第23図-1	図版11-2d	不明銅製品	3-7区 SK01 上層	22×7			1	穿孔があり飾り金具か
第23図-2	図版11-2a	釧首	3-1区 1層	53	10		10	象嵌の痕跡有り
第23図-3	図版11-2b	釧首	3-2区 2層	68			5	つぶれているため直径は不明
第23図-5	図版11-2c	釧首	3-2区 3層	70	10		8	受け部欠損
第23図-6	図版11-2e	不明銅製品	3-6C区 1層	25×13			3	
第23図-4	図版11-2g	不明銅製品	4-A7区 1層	107×35		5	15	
第23図-7	図版11-2f	不明銅製品	3-6C区 1層	27×13			2	

第4表 出土遺物観察表〔古 銭〕

拝図番号	図版番号	銭 文	出土地点：層位	寸 法 (mm)				備 考
				外径	内径	厚さ	重さ(g)	
第19図-1①	図版11-3a	永楽通寶	3-1区 2層上	24.6	5.8	1.5	3	②と同型。裏側に②が付着。
第19図-1②	図版11-3a	永楽通寶	3-1区 2層上	24.6	5.8	1	2	①と同型。表側に①が付着。
第19図-2	図版11-3b	寛永通寶	3-P29 上層	24.3	5.6	1.3	2	
第19図-3	図版11-3c	寛永通寶	3-8区 3層上	24.5	6	1.4	2	
第19図-4	図版11-3d	寛永通寶	3-6C区 2層	23	6.2	1	2	
第19図-5	図版11-3e	寛永通寶	4-A5-6 2層	28	6.8	0.9	4	
		不明	4-SK05 下層	24	6.5	2	1	
		○通○	4-S D02	不明	6.5	2	0.5	

第5表 出土遺物観察表〔基 石〕

図版番号	遺物名	出土地点：層位	形 状	規 格 (mm)			備 考
				直径(長径)	厚 さ	重さ(g)	
図版10-3a	基 石	3-1・2区 SD 01	不整円形	16.8	4.8	1.5	白用
図版10-3b	基 石	3-1区 3層上	円形	21	4.5	3	
図版10-3c	基 石	3-6C区 2層	不整円形	21.5	7	4.5	白用
図版10-3d	基 石	3-6D区 2層内	不整楕円形	21	4.6	2	
図版10-3e	基 石	3-8区 1層	不整円形	20.2	4	2	
図版10-3f	基 石	3-8区 1層	円形	22.1	5.5	5	白用 (赤茶褐色を呈する)
図版10-3g	基 石	3-8区 3層上	円形	18.8	2.2	2	片面が剥離している
図版10-3h	基 石	3-8区 3層上	円形	20.5	2	1	片面が剥離し縁辺が損壊
図版10-3i	基 石	3-8-2区 3層上	円形	21.2	5.2	4	
図版10-3j	基 石	3-喪棟	不整楕円形	26	5.8	5	
図版10-3k	基 石	4-P23	不整円形	21.2	8	5	白用
図版10-3l	基 石	4-P51 4層上	不整円形	25	6.2	5	
図版10-3m	基 石	4-P141	不整楕円形	21	6.5	3	
図版10-3n	基 石	4-A1・2区 SD 01 覆土	楕円形	23.5	7	5	白用
図版10-3o	基 石	4-A4区 1層	不整楕円形	21	5.8	3	白用
図版10-3p	基 石	4-A4区 1層	円形	19.2	3.1	2	片面が剥離
図版10-3q	基 石	4-A7・8区 1層	不整楕円形	21.5	6.2	3	
図版10-3r	基 石	4-B区北 2層	楕円形	20	8	4	

第2節 まとめ

本調査では主に中世に利用されたと考えられていた「新城館」に比定される平場を調査した。その結果4間3間2面庇の掘立柱建物(SB01)の存在と、これより遡る大型の掘立柱建物(SB03)の存在が確認された。SB01は18世紀後半の年代が与えられており、その北側に主軸を描いて営まれた4-SD01も同じ年代が与えられている。SB03は出土遺物が少なく明確な年代は不明であるがSA02が伴うことが推察される。その他年代が明確な遺構は4-SK03が17世紀前半、3-SK02が18世紀前半に位置付けられるのみである。いずれにせよ本平場が、中世の畠山時代のみならず江戸期においても利用されていたことが判明した。

また、平場西端における柵列(SA01)の範囲が平場の北半分におさまることやSA02、SA06など東西に走る柵列によって、平場の北半分が区画されていた可能性が高いことが判明した。このことは主要な遺構が平場北半分にのみ集中していることから、意識的に区画したことが推察される。なお、平場南側における旧地形の確認により、本来の平場は狭く不定形であったものを盛土して整地し、長方形に形状を整えたことが確認された。したがって、遺構が北側に集中した理由は、不安定な地盤を避けて建造物を構築したためと考えられる。この盛土の年代は不明であるが、不明銅製品(第23図4、図版11-2g)や釘2点、小札(第22図2、図版11-1g)1点などが出土している。

さらに平場入口部の調査を実施したが、入口に伴う明確な遺構を確認することは出来なかった。しかし柵列3、4などは城内路に対して直角であることから、入口に伴う遺構と考えることもできる。そうした場合、4-P91と4-P41は冠木門を構成していた可能性も考えられる。なおこの区域では、これらの柱穴を埋め版築状に整地をした層が確認され、掘立柱建造物を整理し、整地した上に4-P203のような根固め石を伴う礎石立ちの建造物が構築されたということが推

察できる状況である。したがって、この付近は最も改変を受けていない部分と見られ、少なくとも2時期の平場利用の変遷を確認できた。このことは4-SD01が素掘りの時期と石を用いた時期の2時期があった可能性を支持するものであり、その作り変えの時期は整地の時期と一致するものと考えられるが具体的な年代は不明である。この整地層はA1、2区の一部にのみ確認されたが恐らくは平場全体、少なくとも北半分は整地されたものと考えられる。しかし、後世の開墾等により整地層とその上部に存在したであろう礎石・立建造物群は大きく攪乱を受けたと判断された。

この整地層の下からは性格不明の敷石遺構(4-P259)が検出され火を用いた痕跡がみられる。またこの南側に隣接する4-P242は敷石遺構と主軸を同じくすることからこれに伴うものと思われ、敷石遺構で生じた炭化物を廃棄した遺構と判断される。したがって、敷石遺構は少なくとも2回は使用していると判断され、炉や烽火等の施設の可能性も考えられるが、その立地や礫を用いて丁寧に埋め戻していることなどから、何らかの宗教的施設である可能性もあげられよう。炭化物層内に検出された板状の小片が護摩木と仮定すれば、護摩壇のような宗教的施設の可能性を示唆しよう。ただし石を用いた屋外の護摩壇施設というものは類例がみられず、過去にそうした施設が存在したか否か検討中である。

最後にこの平場の特徴として、南側に集中して焼土を多く含む土壌が営まれていることがあげられよう。そのうちの1基(焼土6)から、過去に大規模な火災があったことが確認されたことは、この平場の性格および城内における役割を考える上で非常に重要である。したがって、以下に若干の検討を加えることとする。

文献からみた焼土遺構

焼土6のような遺構は、その状況から大規模な火災があったことを想像させる。すなわち、火災の残骸を埋め立てた穴という解釈が可能であろう。当遺構の性格をこのように考えた場合、城址に因わる火災記事でまず思い当たるのは、畠山氏と伊達氏との抗争の中で、二本松城が落城したときの記事である。

二本松城に関する中世文書は、現在二本松市の地域にはほとんど残されていない。畠山氏が没落したため関係文書のほとんどは失われ、畠山氏を追って当地方を支配した伊達氏の関係文書の多くは、近世初頭に仙台に移されたためである。

しかしながら、その他の地域に現存する文書、あるいは近世の編纂物である文献等から二本松城の中世期を知ることが可能である。ここでは、『二本松市史 第3巻』に収録された文書・編纂物から、天正14年の二本松城落城時の記事を拾い上げてみる。

史料1：伊達治家記録 天正十四年七月五日条

五日戊戌栖安斎元安斎白石宗実へ御使ヲ以テ二本松城中ノ義相馬殿御懇望ニ任セ左ノ通ニ決セラル、此旨相馬殿へ申通セラルヘキノ由仰遣サル、

題目之事

- 一 今月十六日二城可被明渡之事、
- 一 新城新庵両人之進退本領計相立二之内ニ候者何方ニモ被踞候事、
- 一 二城実城計放火、其外家共其儘可指置之事、
- 一 今十四日ニ先彼地へ相馬衆可打入之事、

以上

・相馬義胤の斡旋により二本松が開城したこと、二本松の実城のみに放火すること、十六日の明渡しに先立ち、十四日に相馬衆が乗り込む事等が記されている

史料2：伊達正宗書状写（伊達正宗事蹟考記）

其後音絶、無心元存候、仍而爰許一和之義從相馬御取扱ニ候、種々存分モ候条、乍御催促頻ニ申込候得共、重々御詫言ニ候間、相へ之御志ト存候而及返答候、相違題目之事、

- 一 今月十六日ニ二城可被明渡候事、
- 一 新城、新庵両人之進退本領ヲ相立、二之内ニ者何方ニモ被踞候事、
- 一 二城実城計放火、其外家共其儘可指置候事、
- 一 今十四日ニ先彼地へ相馬衆可打人之事、事々重而、謹言、

七月七日 正宗御判

即休斎

・史料1に同じ

史料3：伊達治家記録 天正十四年七月十六日条

十六日己酉二本松城本丸自焼シテ城主国王丸会津ニ奔ル、城受取ノ義成実ニ命セラル、成実彼地へ行キ本丸ニ假屋ヲ建テ守居ラル、……

・二本松城の本丸が自焼し、伊達成実が本丸に假屋を建てたことが記されている。

史料4：伊達治家記録 天正十四年九月十三日条

十三日乙巳信夫郡大森城主伊達藤五郎殿成実致度ノ軍功アルニ因テ采地御加増安達郡二本松城へ所替仰付ラル、大森城并須川ノ南成実抱ノ地ヲ片倉小十郎景綱ニ賜フ、是亦率公ノ賞ナリ即チ御判ヲ出サル、

史料5：伊達正宗書状写（伊達正宗事蹟考記）

其後無音、無御心元候、扱々ニ普請干今最中之由、上下之大儀令察候、仍而近日自田衆申理ニ者、当方へ用所候而、從相馬者新左、自田者橋刑中途迄可被罷出候由内意ニ候、両家よりの理ニハ、白是片倉小十郎可相出由承候間、若輩与云違應多候へ共、理にまかせいた

し候へく候、併如何様之始末二候共、以塩味自是可及挨拶存候条可御心安候、内々承分ハ五六家当方人魂之義可被存取扱之為出合候由申来候、不入事二候へ共申越候、又自在竹者廿四日直々二飛脚被相越候、如此申上不及是非存候而及懇答候ツ、惣和成就之御元御兩人御談合候首尾も候条、是以申越候、恐々謹言、

極月十五日 正宗御書判

栖安

・天正十四年12月十五日、正宗より八丁目城主伊達栖安斎実元にあてた書状。

二本松城の普請が伊達成実によって進められている様子がしられるもの。この普請は開城の際に焼けて荒廃したための工事と考えられる。実元は成実の父。

史料6：正宗公軍記 二本松義継降参の事附輝宗御生害の事

……二本松籠城相退き候様にと御取扱にて、同年七月十六日、本丸計り自焼候て、会津へ引退かれ候、地下人は思々に相退き候、拙者に城請取り申すべき由仰付けられ候間、其日に罷り越し、本丸に仮屋を仕り、正宗公七月廿六日に、二本松へ御出で御覧なれ候て、其日帰らせられ候、塩の松は、白石若狭拝領申し候、其中数多諸人へ御加増に下され候所も御座候、二本松は成実の下され候、拙者跡大森は、片倉小十郎に下され候て、八月初に米沢へ御帰陣なされ候、先づ安積表御無事の分にて、往来候者、送を以て罷り通り候体にて御座候、(下略)

・本丸が自焼した後、成実が城を受取り、本丸に仮屋をたてたことがわかる。

史料7：会津四家合考 卷之二・二本松梅王没落の事

……同七月十六日、二本松の城中に火を懸け、梅王と七郎と、兄弟二人打連れて、会津を指して落ちにける、頓て其跡へ、伊達成実入替り、仮屋を作り、清げに掃除などして、其由、小浜へ註進しければ、同廿二日、政宗、二本松へ打出で、四方を巡見ありて、其日晚景に小浜へ帰る、其後、二本松をば伊達成実、大森は片倉小十郎、四本松をば白石若狭守等が、忠實に宛行はれ、八月始の頃、政宗、米沢へ帰られければ、一先づ仙道中は穩なり、(下略)

・火をうけた二本松城の跡へ成実が入り仮屋を作って清掃をしたことが記される。

「会津四家合考」は寛文二年(1662)会津藩士向井吉重の著述である。

史料8：奥羽永慶軍記 卷九・二本松後詰合戦、同く落城の事

……七月十六日、本丸に火をかけ自焼して、国王丸は会津にぞ退きける、無念なりし事どもなり、政宗は終に二本松を手に入れ、一門安房守成実を籠置けり、塩の松には白石若狭守、大森の城には片倉小十郎居住す、政宗は八月米沢にぞ馬を納めける、

・本丸が自焼し、成実の居住するところとなったことが記される。

史料9：奥陽仙道表鑑（岩磐史料叢書上）巻七・渋川軍並梅王没落之事

……二本松近辺皆政宗に属し二本松の城へ加勢の路絶えければ梅王が兵供兵糧尽き籠城叶わずして新城彈正麿子田右衛門佐等相計ひ二本松梅王と同じく七郎を具して同年七月十六日二本松の城に火を掛けて会津を指して落ち行き給へば政宗頓て入れ替り城の掃除なさしめ其の後二本松をば伊達藤五郎成実にと与へ大森の城を片倉小十郎にと与へ四本松の城を若狭守が忠賞に宛て行はれて八月始め頃政宗は米沢へ帰城せられたり、あゝ悲い哉畠山探題累代の家続きたりし二本松も伊達の武猛に碎れ永く先祖の領地を他人の物とせられしこそ口惜しき事どもなり、

・二本松城が自焼し、その跡を掃除して伊達成実にと与えたことが記される。

「奥陽仙道表鑑」の作者は木代定右衛門、正徳四年(1714)の成立である。

史料10：新編東国記 巻四 二本松梅王没落事

……されども梅王強敵に透間をねらはれ、始終こらふべくも覚えねば、同七月十六日、二本松の城に火を掛け、梅王と弟七郎打ちつれ、会津をさして落ちにける、頓て其跡に伊達成実入替り、仮屋をかけ、此由を小浜に注進しければ、同二十二日政宗二本松に打出で、四方を巡見あつて、其日の晩景にぞ歸られける、其後二本松をば伊達成実に、大森をば片倉小十郎に、四本松をば白石若狭に充行はれ、八月初旬に政宗は米沢に歸られける、……

・城が自焼した後、成実が城を受取り、仮屋をたてたことがわかる

「新編東国記」は「新編東太平記」ともよばれ、編者、成立年月とも不明であるが、正徳二年(1712)三月の序があることからそれ以前の成立と考えられるものである。

史料11：松藩搜古巻第二 天正以来二本松塩松芦名領分界并伊達蒲生上杉加藤領知之弁

……二本松ノ城モ翌年七月自焼シテ会津へ退キ安達郡ハ不残手ニ入タリ、……

・著者は藩士成田頼直、寛政11年(1799)に完成した「松藩搜古」を修正・増補して文化元年(1804)に成立した。

史料12：松府米歴金華鈔 巻之中 二本松落城并ニ義継葬送之事付り高越硯石觀音之事

……同十六日二本松の本城斗自焼して会津の芦名平四郎義広を頼むべしと、……

・著者は藩士沢崎実備で、安永3年(1774)に成立した。「金華山香泉寺の祖阿上人から、二本松城の由来を誌すことを求められ」て執筆したという。「金華鈔」という名称も山号に由来する。畠山家の由来や天正の合戦を中心に当時の東安達、西安達のことを記した貴重な資料である。内容的には「山口道斎物語」が骨子となっているものとみられる。

史料13：山口道斎物語

……無是非同き年七月十六日本丸を自焼して会津へ御退きなり、御供の衆ハ御一門其外麿子田を始皆々御供して会津勢と一ツに成て安積表にて度々伊達と合戦有けり、……

・ 天正年中に畠山氏に仕えた山口猪之允が物置ったものを記述したものと解されている。しかしその原本は紛失し目録だけが残存し、その目録と合致した『二本松城由来畠山記』と題した写本を竹田町の聖武式という人が所持していたのでこれを朝倉霜台(沢崎実備)が天明5年(1785)に書写し、これを俗に「山口道斎物語」と呼ぶようになったと伝えられる。したがって成立年代は不明である。

以上、13の文献をあげてみたが、いずれも二本松城が「自焼」したと伝えられている。「自焼」した場所は“実城”“本丸”“城中”“城”“本城”と様々に記され、これまではその名称から本丸平場が火災の場所と考えられてきた。ところが、平成3年の本丸平場での発掘調査の際には、大規模な火災の痕跡を検出することはできなかったのである。(['二本松城址I』参照)。したがって、「自焼」の記事が史実だとすれば、本丸平場の他に火災を受けた場所が存在するはずであり、そこが“本丸”的役割を果たしていた場所であると考えられよう。さらに、史料1、史料2によれば本丸以外はそのままにしておくようにとの指示がなされていることから、本丸以外は火を受けていないはずであるから、火災を受けているところが本丸として扱われていた場所と判断することができよう。

また史料7、史料9によれば、「自焼」した二本松城は伊達成実によって掃除され、後に成実に与えられたと伝えている。新城館で検出された焼土6は、まさに火災の跡を整理した土塊と判断されることから、これらの記載を裏付けるものといえよう。

なお、成実が入城した際に仮屋をたてたことが、史料3・6・7・10からわかる。この仮屋らしき建造物跡は平成3年の本丸平場発掘調査の際に検出されている。しかしながら、「自焼」した場所が新城館であったとすれば、当平場においても、仮屋の検出の可能性があるため、今後の調査結果と既調査結果とをあわせての再検討をすべきと考えている。

史料5にみられる成実の「普請」の記事は、落城後、仮屋を設け掃除をした後も、城内の工事を実施していたことがうかがわれる。しかしその場所、内容、規模等が全く不明であるため、城内において今後調査を進めていく際に、留意していききたい記事である。

また、この平場は中世に利用されていた率が高いにもかかわらず、発掘調査の際にその時期の生活用品がほとんど出土していない。これは「自焼」する前に整理し、持ち出してしまったためと解釈することで説明できる。さらに焼土6の出土遺物に陶磁器類等生活用品がほとんどないことは、火災にあった建造物が生活するための施設ではなかったか、あるいは整理した上で火災にあったかのどちらかである。後者だとすればまさに「自焼」であり、その記録は前述の「本丸」に因してのものしか残されていない。

これらのことから、大規模な火災の痕跡がみられる新城館は、本丸として火災を受けた場所

であり、焼土6はそれを整理した際の土壌と考えることができる。したがって、新城館は天正期には本丸的機能を有した平場であった可能性が高いといえよう。

自然科学からみた焼土遺構

当遺構からは炭化材がいくつか出土しており、前述のとおりカヤ状および竹状の炭化物が、最下層から特に多く出土している。これらカヤ状、竹状の炭化物については、分析を実施してもその種別までは特定しにくいとのことであるので、その他の炭化材についてのみ樹種同定および年代測定を行った。詳細については付章として掲載したため、そちらを参照いただきたい。

分析の結果、当遺構内からはクリ材の炭化物、竹、カヤの炭化物、多量の焼土が検出されていることが判明した。カヤの出土状況や焼土の観察から、いずれも建材の可能性が高いと判断された。すなわち、柱はクリ材を用い、屋根はカヤ葺き、土壁の建造物が想定できるのである。なお、実年代については測定の結果に幅があり特定するには至らなかった。

以上、当遺構について検討した結果、少なくとも天正期には新城館は本丸的機能を果たしていた可能性があり、当時の建造物はクリ材、カヤ葺き、土壁の建造物であったと考えられる。しかしながら、考古学および、自然科学の面からも年代が特定されていないため、新城館が「実城」であったことを断定することはできなかった。

このように、今回の調査により二本松城の歴史、とくに史料の少ない畠山時代を考える上で新たな資料を得ることができたことは、大きな成果であったといえよう。また、江戸期には利用されていないと思われた平場において大規模な建造物が存在したことが判明した。したがって、江戸期の本丸付近の利用状況および目的を明らかにすることも、今後の大きな課題といえよう。

参考文献

- 1981 『二本松市史 第3巻』原始・古代・中世 資料編1 二本松市
- 1981 『図録 日本の甲冑武具事典』笹間良彦著 柏書房
- 1986 『美濃焼』考古学ライブラリー17 田口昭二著 ニューサイエンス社
- 1992 『二本松城址Ⅰ』 二本松市教育委員会
- 1995 『概説 中世の上器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 1997 『二本松城址Ⅱ』 二本松市教育委員会
- 1998 『二本松城址保存管理計画報告書』二本松市教育委員会
- 1998 『岸家跡—近世家跡の調査—』福島市教育委員会
- 2000 『三春城下町関連遺跡発掘調査報告書』三春町教育委員会

付章 二本松城址第3次調査出土遺物における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 二本松城址、少年隊の丘（西区）出土炭化材の放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

No.	試料	試料の種類	前処理・調製	測定法
1	5区、焼土6	炭化材	酸／アルカリ／酸洗浄 ベンゼン処理	β -線計数法 (液体シンチレーション法)
2	6区、P143	炭化材	酸／アルカリ／酸洗浄 長時間測定 ベンゼン処理	β -線計数法 (液体シンチレーション法)

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代	測定No. Beta-
No.1	190 $\pm$ 50	-24.9	1900 $\pm$ 50	交点 AD 1675,1775,1800,1945 2 σ AD 1645 TO 1950 1 σ AD 1660 TO 1690,AD 1735 TO 1815 AD 1925 TO 1950	123118
No.2	250 $\pm$ 70	-24.6	260 $\pm$ 70	交点 AD 1655 2 σ AD 1470 TO 1700,AD 1720 TO 1820 AD 1855 TO 1860,AD 1920 TO 1950 1 σ AD 1525 TO 1560,AD 1630 TO 1675 AD 1775 TO 1800,AD 1945 TO 1950	123119

(2 σ : 95% probability, 1 σ : 68% probability)

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。

5) 測定No

試料の測定は、Beta Analytic Inc.(Florida, U.S.A)において行われた。Beta-は同社の測定Noを意味する。



1 SA03・SA04・SA05 精査状況（北より）



2 SA01 精査状況（南より）

上段：第4次調査（9T）

下段：第3次調査



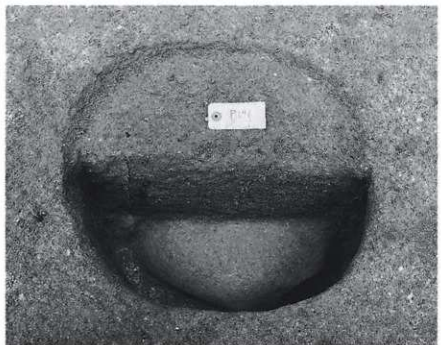
3 4-SD01 石組部検出状況（東より）



1 4-P67 半截状況



2 4-P105 半截状況



3 4-P196 半截状況



1 4-P242 半截状況



2 4-P203半截状況



3 3-P143 半截状況

4 3-P143 出土炭化材





1 焼土5 精査状況(東より)



2 焼土6 半截状況(東より)



3 焼土6(底部)
漆塗木製品出土状況

1 石組遺構[4-P51]精査状況
(南より)



2 石組遺構1[4-P51]精査状況
(南東より)

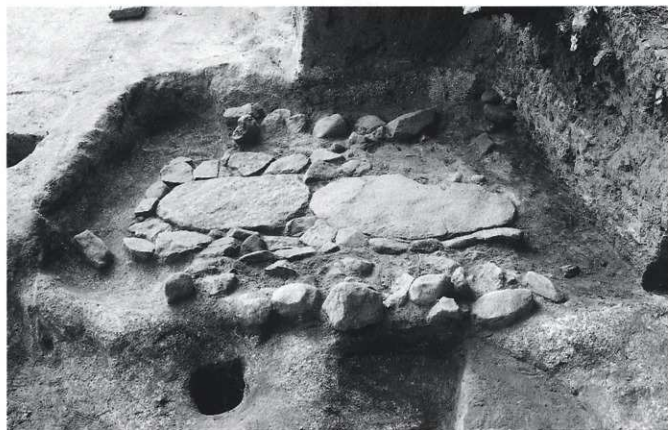


3 石組遺構2精査状況(南より)

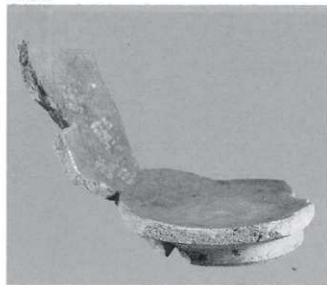




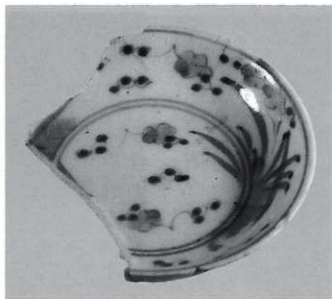
1 石敷遺構 [4-P259] 精査状況 (南より)



2 石敷遺構 [4-P259] 精査状況 (東より)



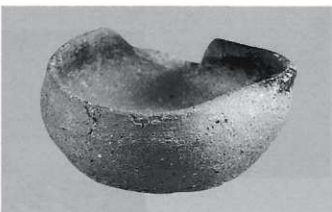
1 碗：相馬 (3-P139,3-SD01)



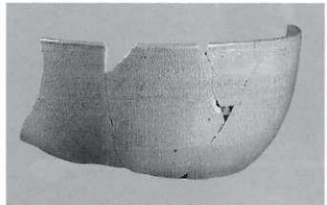
5 皿 (4-P72)



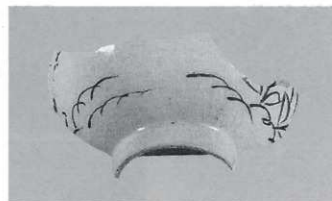
2 坏 (3-P50)



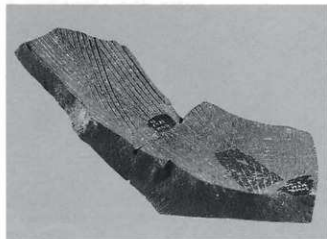
6 灯明皿 (4-SD01付近)



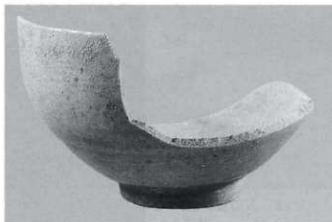
3 碗：肥前 (4-SK03)



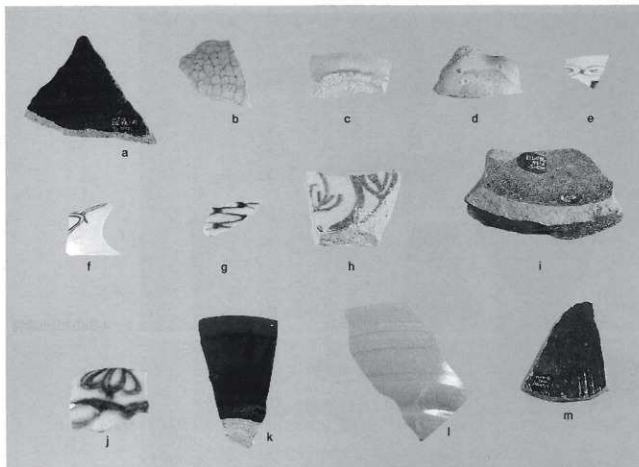
7 盃：肥前、赤絵 (3-P62)



4 すり鉢 (3-P39)

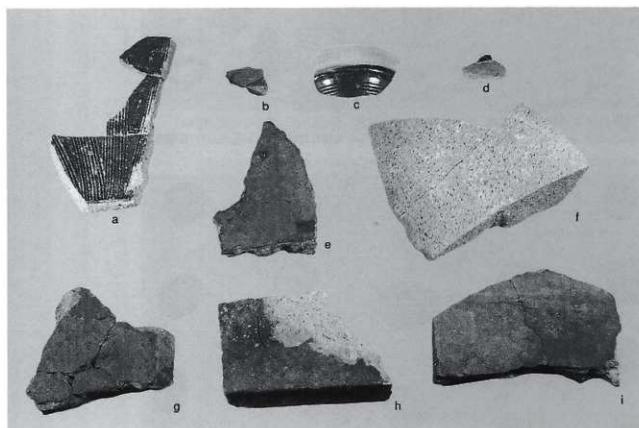


8 碗：相馬 (3-SK03)



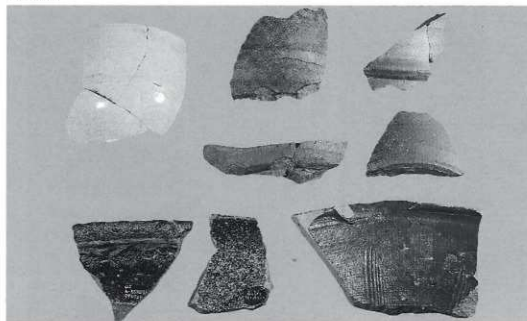
1 遺構内出土遺物 (1)

a: 焼土1、b~d: 焼土3 (美濃、伊万里、唐津)、e: 焼土4 (肥前)、f: 3-P35、g: 3-P54、h: 3-P62 (志野織部)、i: 3-P136 (岸、匠鉢)、j: 3-P138 (明)、k: 3-P149 (天目)、l: 4-P35 (瀬戸)、m: 4-SD01 (本郷)

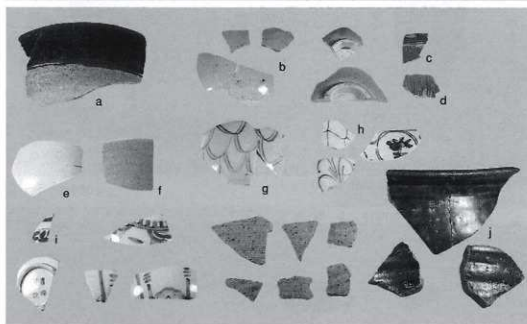


2 遺構内出土遺物 (2)

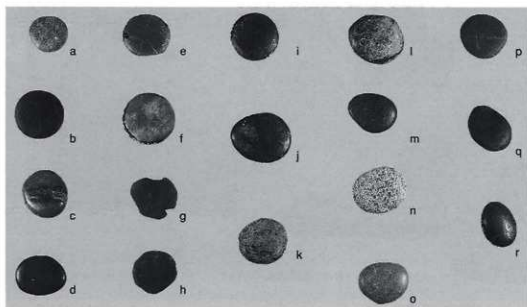
a: 3-P52・4-P259、b: 4-P67 (唐津)、c: 4-P72、d~f: 4-P51、g: 3-P131、h: 3-P41、i: 4-P170



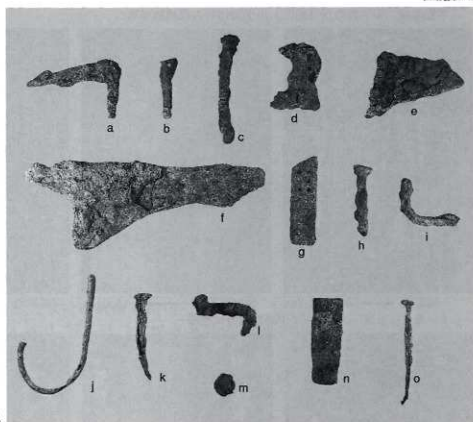
1 4-SK03出土遺物



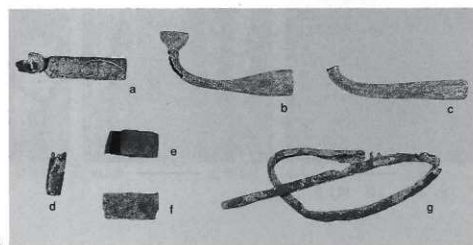
2 遺構外出土遺物 a:本町、b:相馬、c:刺緑釉の徳利、d:相馬(流しがけ)、e:京・信楽、
f:京焼風、g:肥前(二重網目)、h:一重網目(17世紀)、i:明、j:岸(17世紀後半)



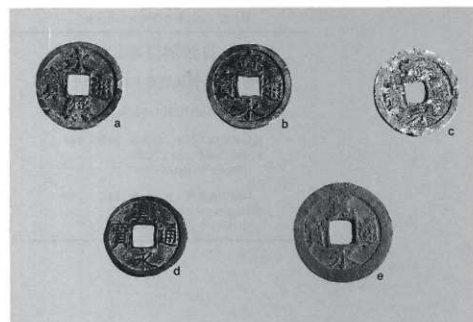
3 出土遺物：基石



1 出土遺物：鉄製品



2 出土遺物：銅製品



3 出土遺物：古銭

図版12

二本松城址、少年隊の丘（西区）出土炭化材の顕微鏡写真



横断面 ————— :0.4mm



放射断面 ————— :0.04mm



接線断面 ————— :0.4mm

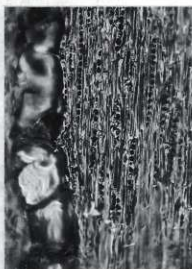
1. No.2 6区 P143 マツ属複維管束亞属



横断面 ————— :0.4mm



放射断面 ————— :0.4mm



接線断面 ————— :0.2mm

2. No.1 5区 焼土6 クリ

報 告 書 抄 録

ふりがな	にほんまつじょうし3							
書名	二本松城址Ⅲ							
副書名	平成10・11年度発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	二本松市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	中村真由美							
編集機関	福島県二本松市教育委員会							
所在地	〒964-8601 福島県二本松市金色403番地の1							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
にほんまつ じょうし 二本松城址	ふくしまけん にほんまつし かくなひ 福島県二本松市郭内4丁目	07210	00019	37° 35' 45"	140° 25' 51"	第3次 19980608～0724 第4次 19990607～0821	1,100㎡	保存管理 計画に基 づく資料 収集
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
二本松城址	城郭	中世～近世	掘立柱建物跡 3 櫓列 6 焼土遺構 6 石敷遺構 1 石組遺構 2		陶磁器(肥前、相馬、岸、 瀬戸、瀬部) 漆塗木製品 銅 ヒウチガネ コザネ 鎌 碁石 古銭		大規模な火災の痕跡。 18世紀後半まで平場を 使用していたことが判 明。	

二本松市文化財調査報告書 第15冊

二本松城址Ⅲ

平成10・11年度発掘調査報告書

平成12年3月31日発行

編集・発行 福島県二本松市教育委員会
福島県二本松市金色403番地の1
☎0243-23-1111 〒964-8601

印刷 株式会社 日進堂印刷所
福島県福島市正野字梅場1番地の1
☎024-594-2211 〒960-2194

©2000